

深さ5-10cmである。ピットは検出されなかった。掘り形は床面全体を掘り下げられ、床下土坑が3基検出された。

出土遺物はやや多く見られるが、接合率は悪い。須

器は環、甕、壺等が認められる。土師器は環、甕が見られ、全土器量の7割程度を甕の胴部片が占める。他には、土製紡錘車が1点出土している。

第41号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	環	(12.8)	3.5	(8.4)	ABF	A	灰	40	覆土	未野産
2	環	(12.4)	3.2	(9.2)	ABG	A	明褐	20	カマド	内外面磨耗著しい
3	環	(11.1)	3.0	(9.1)	AB'	A	橙	20	床下	内外面磨耗
4	甕	(20.6)	5.0		AB'C	A	にふい橙	20	カマド	内外面やや磨耗
5	甕	(20.4)	5.8		AB'	B	明赤褐	5	覆土	
6	甕	(21.5)	8.5		ABCG	B	明赤褐	20	カマド	
7	甕	(20.1)	4.7		AB'C	A	にふい褐	15	カマド	内外面磨耗
8	甕		2.6	(4.0)	AB'C	B	橙	75	床下	
9	甕		5.9	4.4	AB'C	B	褐	25	カマド	
10	甕		(7.6)	(4.0)	AB'C	B	赤褐	40	カマド	
11	甕	(20.6)	27.3		AB'CG	B	にふい橙	20	覆土	内外面やや磨耗
12	紡錘車	上径3.8cm、下径3.7cm、厚さ2.1cm、孔径0.8cm、重さ36.8g AG にふい黄橙							覆土	全体的に磨耗し丸みを帯びる

第42号住居跡 (第92回)

Q-32グリッドに位置する。第43・44・45・46号住居跡と重複し、何れの住居跡より新しい。平面形態はほぼ方形で、規模は長軸3.43m、短軸3.37m、深さは0.20-0.24mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

床面は平坦で、明瞭な硬化面が確認された。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は概ね2層に分かれる。

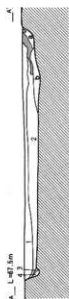
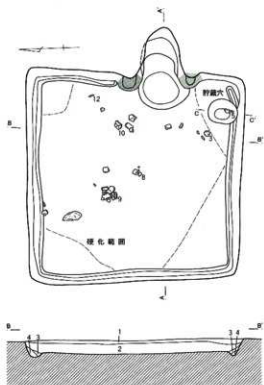
カマドは東壁中央よりやや南寄りに設置される。燃焼部は床面を5cm程掘り込み、覆土には焼土層が残存

し、最下層では厚い灰層が見られた。袖はローム主体で構築されていた。貯蔵穴は南東コーナー近くに位置し、南壁に接していた。37×47cmの楕円形で、深さは17cmである。壁溝はほぼ全周し、幅14-27cm、深さは約7cmである。ピットは検出されなかった。

出土遺物は住居全体から多く見られるが、接合率は悪い。須器は環、高台付環、甕等が、土師器には環、甕が認められる。他には砥石、鎌と思われる鉄製品が出土し、貝穴状凝泥岩が7点見られる。

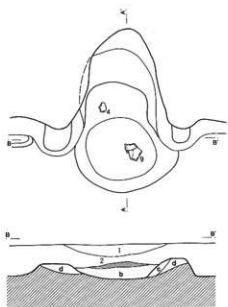
第42号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考	
1	環	(13.3)	3.6	(6.0)	ABFG	A	灰白	20	覆土	未野産 底部回転糸切り	
2	環		1.1	(8.0)	ADF	A	灰	30	覆土	南比金産	
3	高台環		1.3	8.9	AB'CFG	C	灰褐	100	床直	未野産	
4	環	12.4	3.8	8.5	ABCG	A	赤褐	70	カマド	内外面磨耗	
5	環	12.5	3.5	9.3	AB'CG	B	明赤褐	85	貯蔵穴		
6	環	(12.8)	3.4	(7.8)	AB'	C	にふい褐	20	カマド	内外面磨耗著しい 放射状暗文	
7	環	12.8	4.0	11.3	ABG	B	赤褐	80	床下	内外面やや磨耗 口縁端油煙付着痕	
8	甕	(21.6)	(5.2)		AB'CG	A	明赤褐	15	床直		
9	甕	(19.7)	21.1		AB'C	A	橙	25	床直・カマド	内外面磨耗	
10	甕	(20.6)	19.5		AB'G	B	にふい赤褐	20	床直	内外面やや磨耗	
11	砥石	長さ6.7cm、幅6.3cm、厚さ4.1cm、重さ281.82g							覆土	凝灰岩	刃傷あり
12	鉄鏝?	現長10.7cm、頸部断面幅最大0.6×0.6cm、重さ30.24g							床直	鉄鏝としたら頸部一部破片	



第42号住居跡

- | | |
|--------------|---|
| 1 暗褐色 細砂質シルト | 焼土小ブロック多
白色粗砂・炭化物・
ローム粒少 |
| 2 暗褐色 細砂質シルト | ローム小ブロック散
焼土小ブロック多
白色粗砂散
炭化物・ローム小ブロック
ローム粒少 |
| 3 褐色 シルト | ローム小ブロック・ローム粒多
壘材埋設土 |
| 4 暗褐色 シルト | 焼土小ブロック・炭化物少
白色粗砂散 壘材腐食土+壘崩落土 |
| 5 黒褐色 シルト | 焼土小ブロック・炭化物多
ローム小ブロック散 |

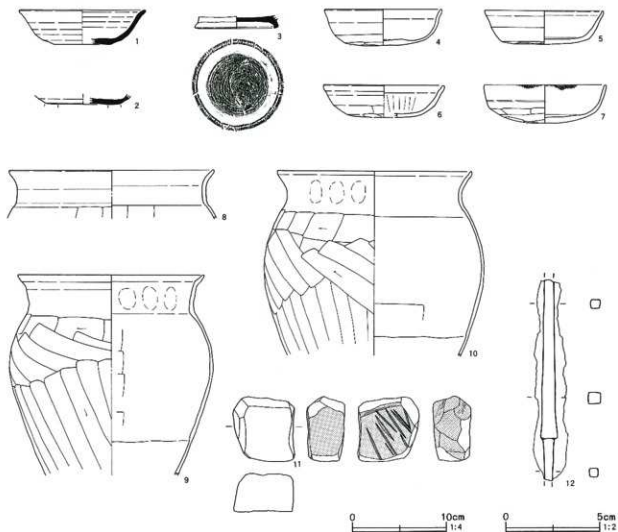


第42号住居跡カマド

- | | |
|--------------|-----------------------------|
| a 暗褐色 シルト | 焼土小ブロック・白色粗砂少
炭化物多、煙道流入土 |
| b 黒褐色 灰層 | 有機質シルト 焼土小ブロック・
炭化物多 |
| c 褐色 粘土質シルト | 焼土小ブロック多
ローム小ブロック主体 |
| d 暗褐色 粘土質シルト | 焼土小ブロック・ローム
ブロック・ローム粒多 |



第93図 第42号住居跡出土遺物



第43号住居跡 (第94図)

Q-32グリッドに位置する。第41・42号住居跡に切れ、第44・45・46・47号住居跡を切る。カマドおよび北壁と西壁を検出したにすぎない。平面形態はほぼ方形になると思われ、残存する西壁は3.65m、北壁は3.58mで、深さは0.22mである。西壁の方位はN-0°-Wを指す。

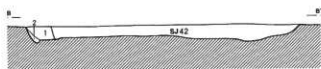
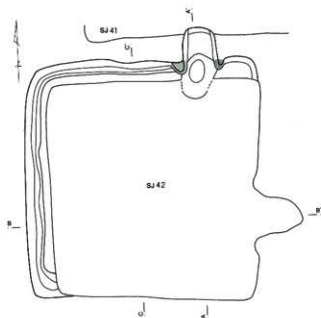
床面は、第42号住居跡とほとんど同じ高さであるため不明とせざるを得ない。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は僅かに確認可能であったが、焼土ブロックや、ロームブロックを含んでおり、埋め戻された可能

性も考えられる。

カマドは北壁中央より東寄りに設置される。煙道部先端を第41号住居跡に前面を第42号住居跡に壊されるが、燃焼部は辛うじて残存し、壁面には焼土が見られた。覆土中には明瞭な焼土層が、下層近くには灰層が残存していた。袖はロームとシルト主体で構築されていた。壁溝はカマド左から西壁にかけて検出され、幅20~31cm、深さ約7cmである。

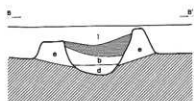
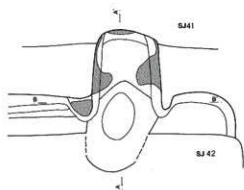
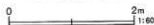
出土遺物は小片少量で、図示できるものがない。須恵器は器種が判別できない小片が2片で、土師器には坏、甕が認められる。

第94図 第43号住居跡



第43号住居跡

- 1 暗褐色 細砂質シルト 焼土小ブロック少、ローム小ブロック
炭化粒・白色中砂微
2 暗褐色 細砂質シルト 焼土小ブロック・炭化粒微、ローム
小ブロック多、白色中砂少、壁材腐食層



第43号住居跡カマド

- a 暗褐色 シルト 焼土小ブロック・炭化粒
白色中砂多
ローム小ブロック少
b 黒褐色 灰層 細砂質シルト 焼土小ブロック少
炭化粒主体
c 明赤褐色 粘土質シルト 焼土小ブロック主体
ローム小ブロック少
炭化粒微
白色中砂多
d 黒褐色 細砂質シルト 焼土小ブロック少
炭化粒・白色中砂多
煙道流入土
e 暗褐色 袖 粘土質シルト 焼土小ブロック
ローム小ブロック多
シルトブロック主体



第44号住居跡 (第95図)

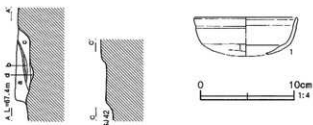
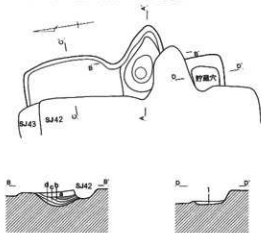
Q-32グリッドに位置する。第42・43号住居跡に切られる。第45・46号住居跡との関係は明らかにすることができなかった。カマド周辺の東壁が確認されたのみであり、住居全体の詳細は不明とせざるを得ない。東壁は3.20m、深さは0.07mである。カマドの方向はS-86°-Eを指す。

カマドは東壁中央より僅かに南に設置される。覆土

中層に焼土層が、下層に灰層が残存していた。残存する左袖は地山を利用して。貯蔵穴は南東コーナーに接する位置で確認され、西半を第42号住居跡に壊されていた。南北が43cm、深さは床面から4cm程度であろう。

遺物は極めて少量で、全て小片であり、全く接合しなかった。須恵器は坏片が3片、土師器には坏、甕が認められる。

第95図 第44号住居跡・出土遺物



第44号住居跡

1 暗褐色 シルト 焼土小ブロック少、ローム小ブロック多、貯蔵穴覆土

第44号住居跡カマド

a 暗褐色 シルト質細砂 焼土小ブロック多、ローム小ブロック少、白色細砂多

b 暗褐色 シルト質細砂 焼土小ブロック多、ローム小ブロック多

c 暗褐色 シルト 焼土小ブロック多、灰層

d 暗褐色 シルト質細砂 焼土小ブロック・ローム小ブロック多



第44号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(10.8)	3.9	(9.4)	AB'G	A	明赤褐	15	覆土	

第45号住居跡 (第96図)

Q-32グリッドに位置する。第41・42・43号住居と重複し、何れの住居跡にも切られる。このため遺存状態は悪く、北西コーナー付近とカマド右側、一部の床面を検出したのみである。平面形態は、一辺が3.30m前後の方形と考えられ、深さは0.10~0.13mである。北壁の方位はN-71°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の詳細は不明だが、埋め戻された可能性がある。

カマドは東壁の南寄りに設置されていたと考えられ、

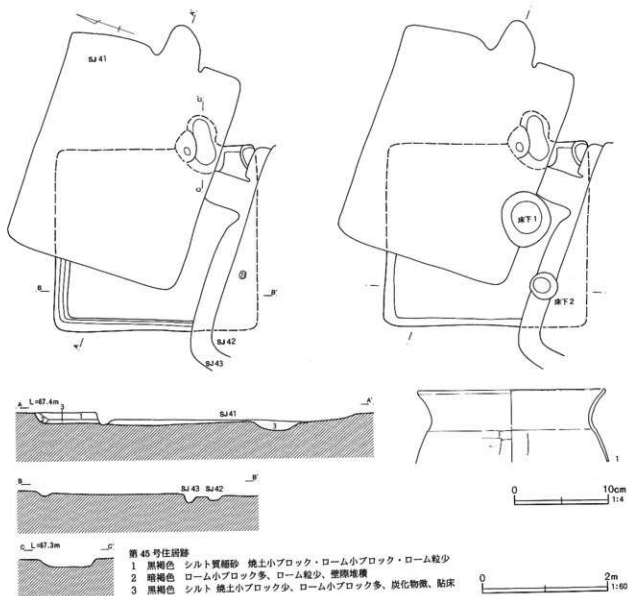
第41号住居跡内に、本住居跡のカマド底面が検出された。南東コーナーに接するように落ち込みが検出されたが、本住居跡の貯蔵穴の確認はできなかった。壁溝は北壁から西壁にかけて検出され、幅16~24cm、深さ6~10cmである。掘り形は床面全体を掘り下げ、床下土坑と思われるものが2基検出された。

出土遺物は小片少量で、図示したものを以外は接合しなかった。須恵器は出土せず、土師器は坏、甕が認められる。

第45号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	(19.7)	7.7		AB'	B	赤褐	15	床下	内外面やや磨耗

第96図 第45号住居跡・出土遺物



第46号住居跡 (第97図)

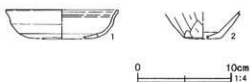
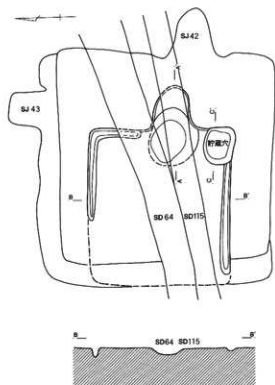
Q-32グリッドに位置する。第42・43号住居跡の床面に、カマドの痕跡と壁溝が検出されただけである。第64・115号溝跡にも切られるため遺存状態は極めて悪く、床面は既になくなってと思われる。第64・115号溝跡は上層の住居跡の断面には確認されなかった。平面形態は、東西に長い長方形と考えられる。残存する規模は東西2.35m、南北2.28mで、掘り込みは見られない。主軸方位はN-90°-Eを指す。

床面、壁、覆土の状況は不明とせざるを得ない。

カマドは東壁ほぼ中央に設置されている。僅かな掘り込みで確認されたが、灰層が残存していた。貯蔵穴は南東コーナーに接しており、48×62cmの長方形で、深さは15cmである。壁溝は南壁と北壁で検出され、幅13~17cm、深さ5~10cmである。

出土遺物は少量で、全く接合しない。須臾器は坏小片が3片、土師器は坏、甕が認められるが上層の住居跡からの混入も考えられる。

第97図 第46号住居跡・出土遺物



第46住居跡

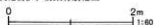
1 暗褐色 粘土質シルト 焼土小ブロック多、ローム小ブロック
炭化物少、埋戻土

第46住居跡カマド

a 暗褐色 粘土質シルト 焼土小ブロック・ローム小ブロック多
炭化材・炭化粒少

b 黒褐色 灰層 細砂質シルト 焼土小ブロック・炭化物少
ローム小ブロック多

c におい黄褐色 シルト質粘土 焼土小ブロック微
ローム小ブロック多
炭化物少、構築材崩落土



第46号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	環	(11.8)	3.0	(7.0)	ABC	B	におい赤褐	15	覆土	内外面やや磨耗
2	甕		2.9	(4.1)	ABC	B	灰褐	25	貯蔵穴	

第47号住居跡 (第98図)

Q-32グリッドを中心に位置する。カマド先端を第43号住居跡に切られる。平面形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸3.48m、短軸3.00m、深さは0.13~0.21mである。主軸方位はN-80°-Eを指す。

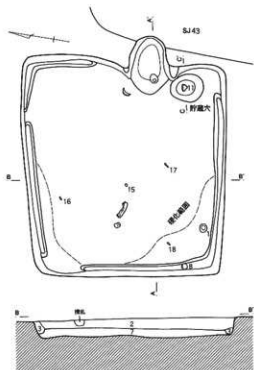
床面は起伏があり、明瞭な硬化面が確認された。壁は開き気味に立ち上がる。覆土はほぼ1層で、埋め戻された可能性がある。

カマドは東壁中央より南寄りに設置され、燃焼部に小ピットが検出された。煙道部の両壁の一部に焼土が

見られ、覆土には薄い灰層が残存する。袖はローム主体の粘土で構築されていた。貯蔵穴はカマド右に位置し、44cm×52cmの楕円形で、深さは17cmである。壁溝は断続的だが全周する。幅18~25cm、深さ約7cmである。ピットは検出されなかった。掘り形は床面全体を掘り下げられ、床下土坑が3基検出された。

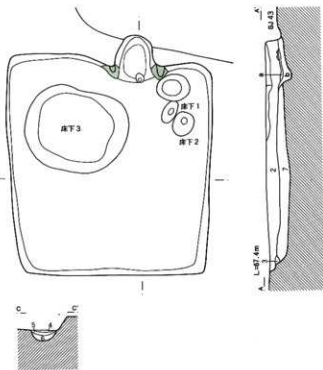
出土遺物が多いが、接合率は良くない。須恵器は环、高台付环が、土師器には环、甕が認められる。他には鉄製刀子3点と土製紡車1点が出土している。

第98図 第47号住居跡

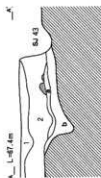
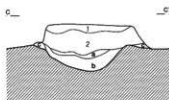
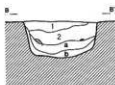
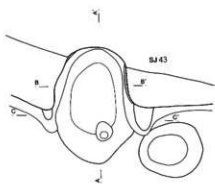


第47号住居跡

- 1 暗褐色 細砂質シルト 焼土小ブロック・ローム小ブロック 細～中砂少、炭化物微
- 2 黒褐色 細砂質シルト 焼土小ブロック・ローム小ブロック 炭化物・細～中砂少
- 3 黒褐色 シルト質細砂 焼土小ブロック・ローム小ブロック微 炭化物多、壁材腐食層



- 4 暗褐色 粘土質シルト 焼土小ブロック・ローム小ブロック多、炭化物少
- 5 暗褐色 シルト 焼土小ブロック多、炭化物主体 炭化材・灰層状の有材質土
- 6 に近い黄褐色 シルト質粘土 焼土小ブロック・ローム小ブロック多 炭化物少
- 7 暗褐色 シルト 焼土小ブロック・マンガン結核少、ローム小ブロック多 粘床



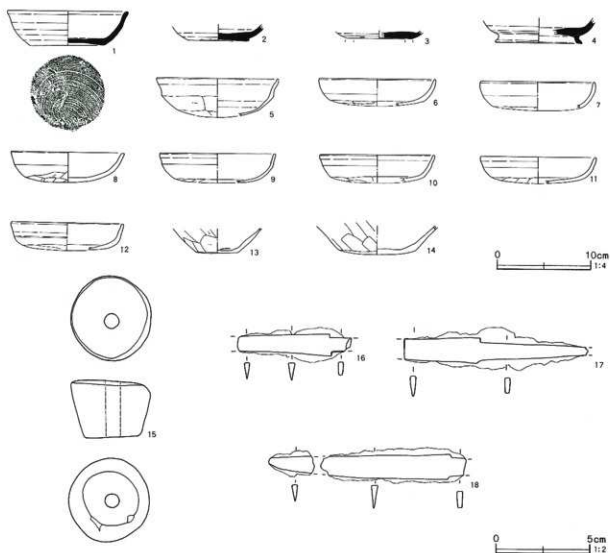
0 2m
1:60

第47号住居跡カマド

- a 黒褐色 灰層 シルト質細砂 焼土小ブロック・ローム小ブロック少 炭化物主体
- b 暗褐色 細砂 焼土小ブロック・ローム小ブロック・炭化物少
- c 暗褐色 袖 シルト質粘土 焼土小ブロック・シルトブロック多 ローム小ブロック主体、炭化物少

0 1m
1:30

第99図 第47号住居跡出土遺物



第47号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	環	12.4	3.7	7.9	AB'CF	B	灰	100	南壁際	末野産 内外面下半土師質色
2	環		1.8	6.6	ABDF	B	灰	65	覆土	南比企産
3	環		0.9	(7.0)	ABC	A	灰白	45	覆土	末野産
4	環		3.7	(9.2)	ABF	A	緑灰	25	覆土	産地不明
5	環	(12.8)	2.9	(8.6)	AB'	A	橙	20	カマド	内外面磨耗著しい
6	環	(12.2)	2.8	(10.0)	AB'	C	にぶい褐	25	覆土	内外面磨耗著しい
7	環	(12.0)	2.8	(9.4)	ABG	A	橙	20	覆土	内外面磨耗著しい
8	環	11.6	3.2	9.1	AB'C	A	橙	100	西壁際	全体に歪み有り
9	環	(12.1)	3.0	(9.1)	AB'G	A	橙	25	カマド	内外面磨耗著しい
10	環	(12.0)	2.9	(9.8)	AB'G	A	にぶい褐	25	覆土	内外面やや磨耗
11	環	(12.1)	2.8	(9.8)	AB'G	A	橙	25	貯蔵穴	内外面磨耗著しい
12	環	(11.8)	2.8	(9.6)	AB'G	B	にぶい橙	25	覆土	内外面磨耗
13	甕		2.6	(4.4)	AB'G	B	にぶい赤褐	40	覆土	
14	甕		3.1	(8.1)	AB'C	C	黒褐	35	覆土	内外面磨耗著しい
15	紡錘車	上径4.3cm、下径3.0cm、厚さ3.1cm、孔径0.8cm、重さ58.35g ABC 橙 床直								
16	刀子	現長6cm、背幅0.3cm、刃幅最大1.2cm、重さ11.45g 床直 刃部～基部破片								
17	刀子	現長9.7cm、背幅0.3cm、刃幅最大1.4cm、重さ26.69g 床直 刃部切先付近・基部欠								
18	刀子	現長2.4+7.8cm、背幅0.3cm、刃幅最大1.4cm、重さ23.53g 床直 茎大半欠								

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第100・101図)

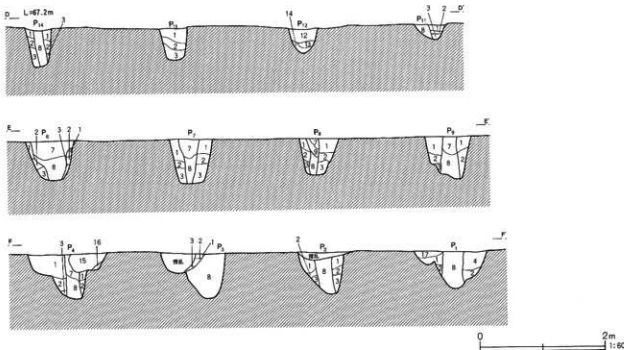
U-39グリッドを中心に位置する。3×2間の建物で、西側に庇を持つ。母屋の規模は桁行6.15m、梁行4.05mで、柱間は、桁行2.00~2.20m、梁行1.90~2.10mとやや幅がある。母屋と庇の間は1.80mである。主軸方位はN-1°-Eを指す。P2およびP3は、一部を攪乱に壊されるが、攪乱が浅かったため検出できた。

母屋の柱穴は、径60~80cmの円形または楕円形である。深さは、42~72cmで比較的深い。建物の北辺

となるP1 (P17・18)、P9、P10 (P15・P16)には底部に小穴が2または3検出され、建て替えの可能性も考えられる。庇の柱穴は径が約45cmで、母屋のものよりやや小さくなり、深さは40~58cmである。P11は、土層観察は出来なかったが、段を持ち、母屋の北辺同様と考えられる。柱痕は検出されたものが多いが、検出できなかったものもある。

遺物は多く出土しているが、全てが小片である。須恵器は環、高台付環が、土師器には環、甕が認められる。

第100図 第1号掘立柱建物跡(1)



第1号掘立柱建物跡

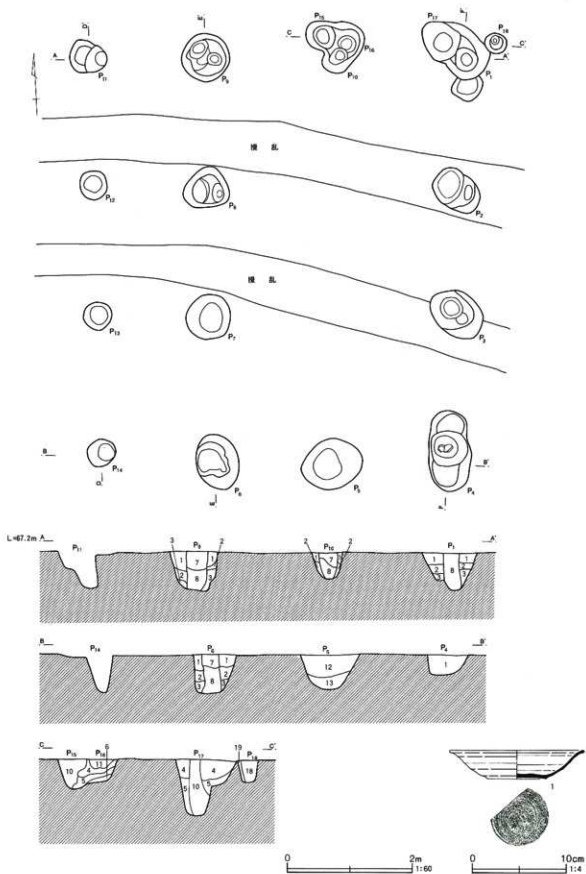
- 1 黒褐色 ローム粒・ロームブロック多、白色火山灰少
- 2 黒褐色 ローム粒・ロームブロック少
- 3 暗褐色 ローム粒・ロームブロック極多
- 4 黒褐色 ロームブロック極多、焼土少、白色火山灰
- 5 黒褐色 ローム粒・ロームブロック少、焼土
- 6 暗褐色 ローム基調で黒褐色土、白色火山灰
- 7 黒褐色 ローム粒・白色火山灰少、砂質
- 8 黒褐色 ローム粒・ロームブロック少、炭化物
- 9 黒褐色 ローム粒・ロームブロック多
- 10 暗褐色 焼土・ローム粒・白色火山灰少

- 11 黒褐色 白色火山灰多、焼土・ローム粒少
- 12 黒褐色 ローム粒・白色火山灰少、焼土・炭化組織
- 13 黒褐色 ローム粒・ロームブロック多、白色火山灰少
- 14 暗褐色 ローム粒・ロームブロック極多
- 15 黒褐色 焼土多、白色火山灰少
- 16 暗褐色 ローム粒極多、白色火山灰微
- 17 黒褐色 焼土・炭化物多、白色火山灰・ローム粒少
- 18 暗褐色 ローム粒・ロームブロック多、白色火山灰
- 19 暗褐色 dに似るが、ローム粒・ロームブロック極多、白色火山灰少

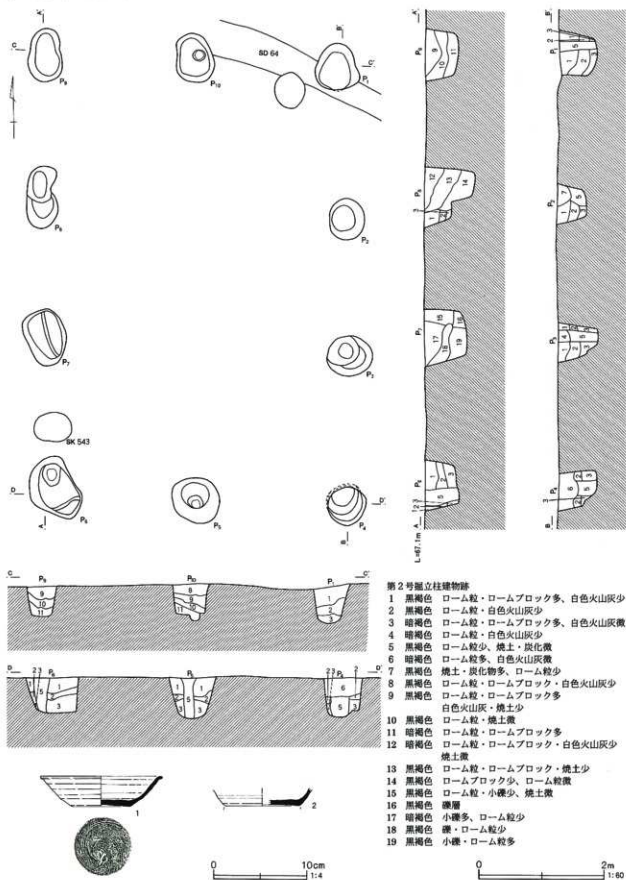
第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	環	(14.1)	3.0	6.2	ABFG	B	灰黄	30	P9	

第101图 第1号孤立柱建物跡(2)・出土遺物



第102図 第2号掘立柱建物跡・出土遺物



第2号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色 ローム粒・ロームブロック多、白色火山灰少
- 2 黒褐色 ローム粒・白色火山灰少
- 3 暗褐色 ローム粒・ロームブロック多、白色火山灰微
- 4 暗褐色 ローム粒・白色火山灰少
- 5 黒褐色 ローム粒少、焼土・炭化微
- 6 暗褐色 ローム粒多、白色火山灰微
- 7 暗褐色 焼土・炭化物多、ローム粒少
- 8 黒褐色 ローム粒・ロームブロック・白色火山灰少
- 9 暗褐色 ローム粒・ロームブロック多
白色火山灰・焼土少
- 10 黒褐色 ローム粒・焼土微
- 11 暗褐色 ローム粒・ロームブロック多
- 12 暗褐色 ローム粒・ロームブロック・白色火山灰少
焼土微
- 13 黒褐色 ローム粒・ロームブロック・焼土少
- 14 黒褐色 ロームブロック少、ローム粒微
- 15 黒褐色 ローム粒・小礫少、焼土微
- 16 黒褐色 層層
- 17 暗褐色 小礫多、ローム粒少
- 18 黒褐色 礫・ローム粒少
- 19 黒褐色 小礫・ローム粒多

第2号掘立柱建物跡 (第102図)

T-39グリッドを中心とし、第1号掘立柱建物跡の約2m北側に位置する。3×2間の建物で、桁行6.90m、梁行4.70mで、柱間は桁行2.10~2.40m、梁行2.20~2.45mと幅がある。主軸方位はN-0°-Eである。

柱穴は、径が55~75cmの円形あるいは楕円形が主体を占めるが、長径が100cmを越すものもある。深さは、48~82cmと深めである。柱痕は、6本検出された。

遺物はやや多く出土しているが、大半が小片である。須恵器は環、高台付環が、土師器には環、甕が認められる。

第3号掘立柱建物跡 (第104・105図)

S-40グリッドを中心しに位置する。3×2間の建物で、南側に庇を持つ。母屋の規模は桁行7.50m、梁

行5.00mで、柱間は桁行2.40~2.70m、梁行2.40~2.60mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

調査当初においてP1、P9、P10は掘立柱建物跡の柱穴と認識できず、土壌として処理され、完掘された後、P2~P8が確認された。

母屋の柱穴は、楕円形が主体をなし、深さは62~80cmと深めである。P9は長径を掘立柱建物跡中心に向けている。庇の柱穴は径50cm前後の円形または楕円形で、深さは40~56cmと母屋に比べると浅くなっている。

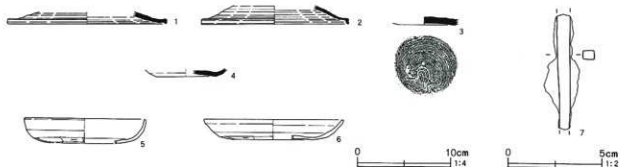
母屋の北辺と南辺の東、約2.15mの延長線上に溝状のビツが検出された。調査時は本掘立柱建物跡との関係は考えなかったが、柱筋の延長線上にあり、他には見られないため、掘立柱建物跡の一部の可能性があると考えた。機能的なものは不明である。

出土遺物はやや多めだが、何れも小片である。須恵器は蓋、環が、土師器には環、甕が認められる。

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	環	(12.8)	3.2	6.0	ABFG	A	暗褐	60	P2	末野産
2	環		1.9	(8.0)	ABG	A	灰	15	P1	産地不明

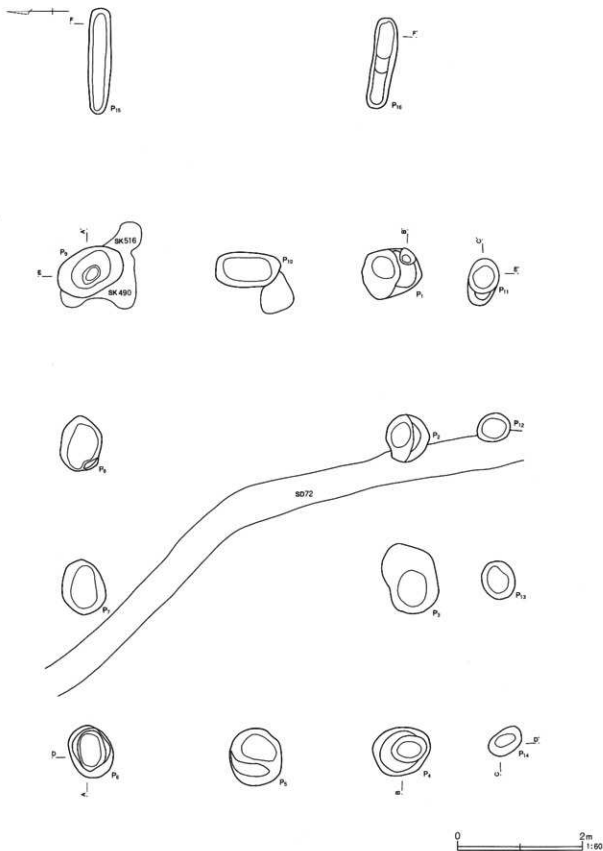
第103図 第3号掘立柱建物跡出土遺物



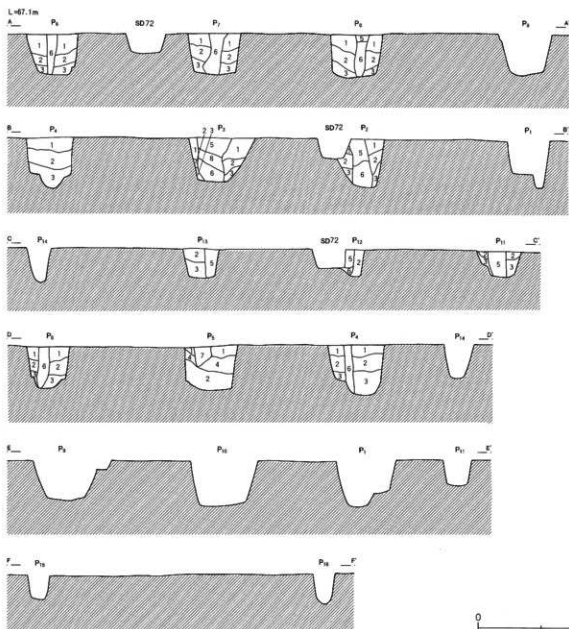
第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋	(17.0)	1.3		ABF	A	灰	5		末野産
2	蓋	(15.8)	2.0		AFG	B	灰	5	P8	末野産
3	環		0.8	6.2	ABDFG	A	灰	10		南比金産
4	環		0.8	(6.4)	AB'F	B	灰	5	P2	末野産
5	環	(12.8)	2.6	(11.0)	AB'G	B	橙	5	P8	
6	環	(14.8)	2.1	(11.6)	AB'CG	B	明褐	20		
7	鉄製品	現長6.1cm、断面幅0.6×0.5cm、重さ10.55g			覆土		角棒状の破片		両側欠	

第104图 第3号掘立柱建物跡(1)



第105図 第3号掘立柱建物跡(2)



第3号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色 ローム粒・ロームブロック多、白色火山灰少
 2 黒褐色 ローム粒・ロームブロック多、小礫
 3 黒褐色 ローム粒・ロームブロック少
 4 黒褐色 1層に似るが、ローム粒・ロームブロック少

- 5 暗褐色 ローム粒多、白色火山灰多
 6 黒褐色 ローム粒微、小礫
 7 黒褐色 焼土多、ローム粒・白色火山灰少
 8 黒褐色 ローム粒・ロームブロック多

(3) 土壌

地神遺跡では総数570基を越える土壌が検出された。このうち出土遺物等から奈良・平安時代の所産と考えられるものを取り上げた。

第2号土壌 (第107図)

W-49グリッドに位置する。第1号土壌と重複するが、新田は明らかでない。平面形態は不整形で、長さは2.00m前後であろうか。幅は1.30m、深さ0.16mである。遺物は図示した土師器環、角棒状鉄製品の他、須恵器環が出土している。

第4号土壌 (第107図)

W-49グリッドに位置する。第3号土壌と重複するが、新田は明らかでない。平面形態は五角形に近い不整長方形で、長さ1.28m、幅1.10m、深さ0.23mである。遺物は須恵器環、土師器環・甕、土製紡錘車、刀子が出土している。

第5号土壌 (第107図)

W-49グリッドに位置する。第6号土壌と重複し、本土壌が新しい。平面形態は楕円形で、長径1.59m、短径1.20m、深さ0.26mである。遺物は須恵器蓋・環、土師器環・甕が出土している。

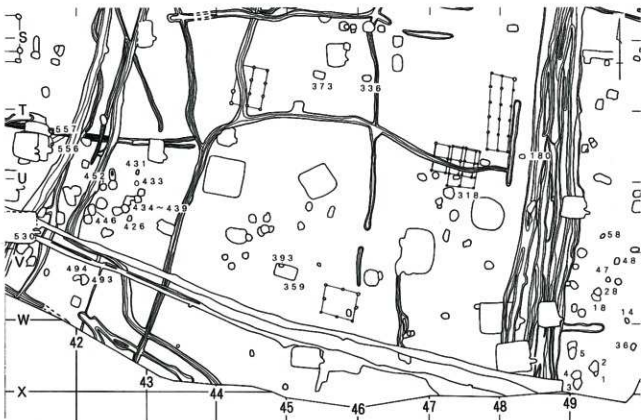
第180号土壌 (第107図)

T-48グリッドに位置する。平面形態は円形で、径約0.75m、深さ0.24mである。遺物は棒状の鉄製品が出土したのみである。

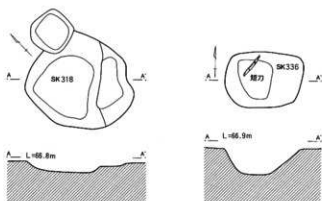
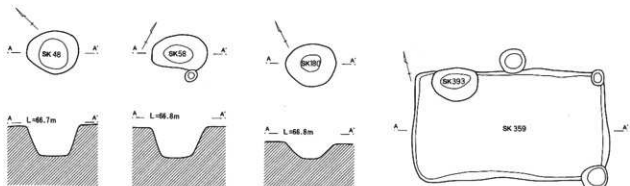
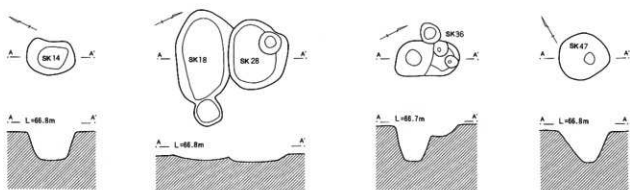
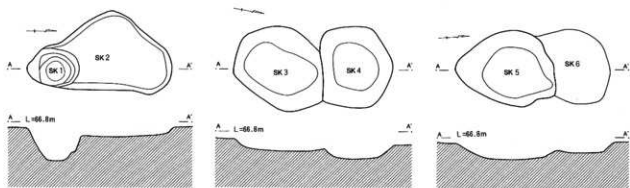
第318号土壌 (第107図)

U-47グリッドに位置する。平面形態は不整形で、長さ1.72m、幅1.40m、深さ0.17mである。遺物は須恵器環、土師器環・甕が出土している。

第106図 地神遺跡奈良・平安時代土壌配置図



第107図 土壇 (I)

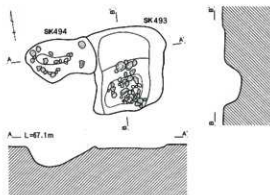
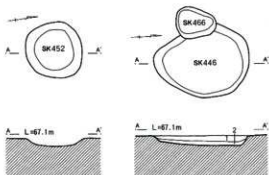
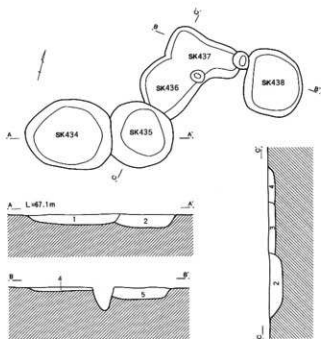
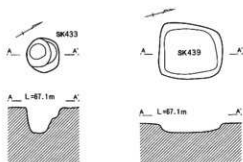
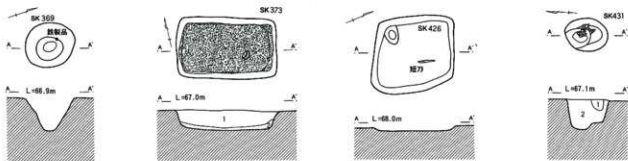


第359号土壇

- 1 黒褐色 ローム粒・白色火山灰・ロームブロック多
- 2 黒褐色 ローム粒・ロームブロック極多、白色火山灰微



第108圖 土壤 (2)



第 373 号土壤

- 1 黑褐色 白色火山灰多、小礫少
- 2 黑褐色 炭化粒層、炭化物・燒土極微

第 431 号土壤

- 1 黑褐色 B □—ム粒・歪角礫・燒土
- 2 黑褐色 □—ム粒・歪角礫・燒土・木炭少

第 434・435・436・437・438 号土壤

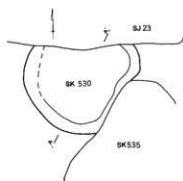
- 1 S K 434 黑褐色 B □—ム粒・歪角礫・燒土少
- 2 S K 435 黑褐色 E □—ム粒・燒土少
- 3 S K 436 黑褐色 B □—ム粒・歪角礫・燒土
- 4 S K 437 黑褐色 B □—ム粒・燒土少、粗砂
- 5 S K 438 黑褐色 B □—ム粒・燒土少、歪角礫微

第 446 号土壤

- 1 黑褐色 C □—ム粒・燒土・粗砂
- 2 黑褐色 E □—ム粒・燒土・木炭少



第109図 土壌 (3)

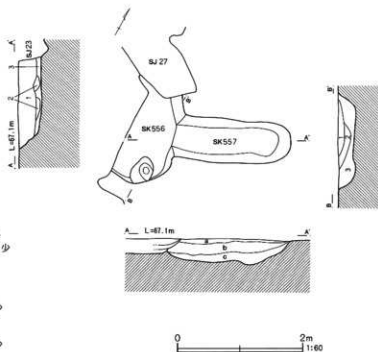


第 530 号土壌

- 1 黒褐色 B ローム粒・焼土・炭化物少
- 2 黒褐色 炭化物層、暗褐色土多、ローム粒・焼土少
- 3 暗褐色 炭化物・ローム粒多、焼土・焼土ブロック少

第 556-557 号土壌

- 1 S K 556 黒褐色 B ローム粒少、焼土
- 2 // 暗褐色 B ローム粒、焼土
- 3 // 黒褐色 B ローム粒・歪角礫・焼土少
- a S K 557 黒褐色 B ローム粒・焼土少
- b // 黒褐色 B 歪角礫・焼土・炭化物少
- c // 黒褐色 C ローム粒・焼土・炭化物少



第336号土壌 (第107図)

S-46グリッドに位置する。平面形態は長方形で、長さ1.24m、幅1.90m、深さ0.40mである。遺物は器種も判別できない土師器の小片2片と、短刀が1口出土している。

第369号土壌 (第108図)

W-45グリッドに位置する。平面形態は円形で、径約0.75m、深さ0.52mである。土器類は出土しなかったが、上端が折れ曲がる用途不明の鉄製品が出土している。

第373号土壌 (第108図)

S-45グリッドに位置する。平面形態は長方形で、長さ1.61m、幅1.00m、深さ0.31mである。底面には炭化物が5cm程堆積していた。遺物は器種も判別できない須恵器と土師器の小片が6片が出土している。

第426号土壌 (第108図)

V-42グリッドに位置する。平面形態は南北に僅

かに長い長方形で、長さ0.77m、幅0.60m、深さ0.15mである。遺物は極少量であるが、須恵器環、高環、器種不明の土師器が出土し、短刀が1口出土している。

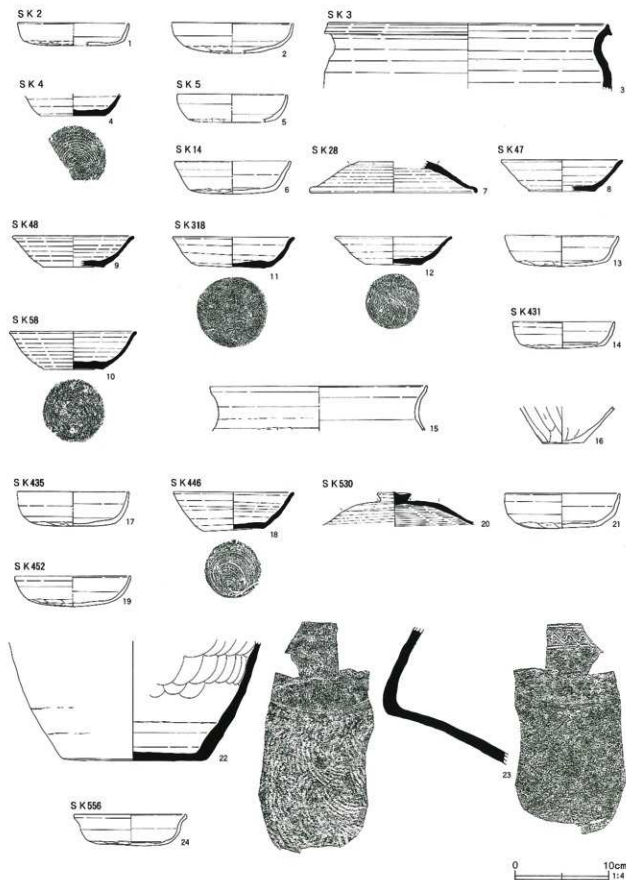
第431号土壌 (第108図)

T-42グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、長径0.66m、短径0.50m、深さ0.47mである。覆土には焼土が含まれ、底面は段が見られた。遺物は土師器環、甕が出土している。

第530号土壌 (第109図)

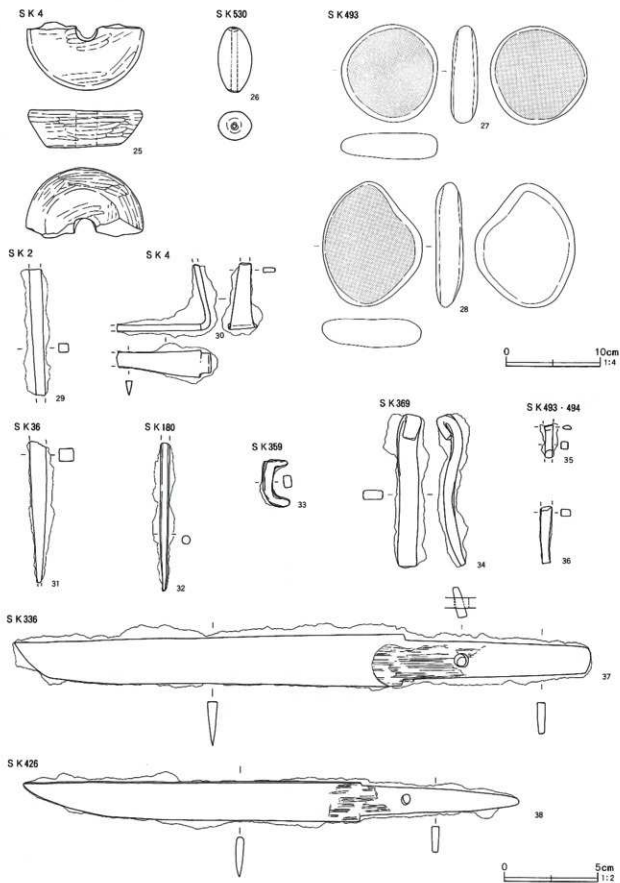
V-41グリッドに位置する。第23号住居跡、第535号土壌と重複し、土層観察では何れよりも古い。平面形態は隅丸長方形に近くなるのであろうか。残存規模は長さ2.01m、幅1.60m、深さ0.39mである。遺物は須恵器蓋、甕、土師器環、甕、台付甕等が認められ、他には土錘が1点出土している。

第110図 土壙出土遺物 (I)



0 10cm 1:4

第111図 土曜出土遺物(2)



土壌出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(11.8)	2.4	(10.6)	AB'G	B	明赤褐	25	SK2	
2	坏	(12.8)	3.2	(10.0)	AB'G	B	にふい褐	20	SK2	
3	甕	(30.0)	7.0		AB'FG	A	灰	5	SK3	
4	坏		2.3	(7.0)	ABDFG	A	灰	25	SK4	南比企業
5	坏	(11.6)	2.9	(9.3)	AB'CG	B	明褐	20	SK5	
6	坏	(12.2)	3.5	(9.3)	AB'G	B	赤褐	45	SK14	
7	蓋	(17.6)	3.3		AB'CFG	C	にふい橙	25	SK28	末野産
8	坏	(12.8)	(3.3)	(7.2)	AFG	B	灰	20	SK47	末野産
9	坏	(12.8)	(3.3)	(6.6)	ABB'FG	A	灰	25	SK48	末野産
10	坏	(13.4)	4.0	6.4	AB'CFG	C	明褐	40	SK58	末野産 土師貫 内外面磨耗著しい
11	坏	12.3	3.2	7.2	ABG	B	灰黄	80	SK318	産地不明
12	坏	(12.6)	3.1	6.0	ABF	A	黄灰	60	SK318	末野産
13	坏	10.7	2.9	8.7	AB'G	B	橙	80	SK318	
14	坏	11.9	3.3	9.5	AB'G	B	明赤褐	60	SK431	
15	甕	(22.9)	4.8		ABT	B	にふい赤褐	5	SK431	
16	甕		3.9	4.3	AB'C	B	明赤褐	5	SK431	
17	坏	(11.8)	3.6	(9.2)	AB'G	B	橙	50	SK495	
18	坏	12.6	3.4	6.2	ABB'FG	A	灰	80	SK446	末野産
19	坏	(12.2)	3.2	(9.5)	AG	B	にふい橙	50	SK452	磨耗
20	蓋	3.3	3.6		ABB'FG	A	灰	50	SK530	末野産
21	坏	12.1	3.7	9.1	AB'CFG	A	橙	100	SK530	底部に5mm位の穴
22	甕		12.6	15.2	AF	C	黄灰	40	SK530	末野産
23	大甕				A	A	灰	5	SK530	末野産
24	坏	11.8	3.3	8.7	AB'G	B	明赤褐	90	SK556	
25	紡錘車	上径6.2cm、下径3.9cm、厚さ2cm、孔径1.1cm、重さ41.55g			AB'CG	褐灰	SK4			
26	土鏃	長さ3.4cm、最大径1.8cm、孔径0.3cm、重さ9.15g			AB'C	にふい褐	SK530			
27	磨石	長さ10.3cm、幅10.2cm、厚さ2.8cm、重さ467.11g			SK493	安山岩				
28	磨石	長さ13.2cm、幅10.5cm、厚さ2.9cm、重さ585.76g			SK493	安山岩				
29	鉄製品	現長6.7cm、断面幅0.5×0.5cm、重さ22.72g			SK2	角棒状の破片	両側欠			
30	刀子	現長5×3.5cm、刃幅最大1.4cm、背幅0.3cm、重さ17.4g			SK4	切先・茎尻欠				
31	鉄製品	現長7.5cm、断面幅0.8×0.7cm、重さ16.29g			SK36	角棒状の破片	釘?			
32	鉄製品	現長7.9cm、断面幅0.4×0.4cm、重さ7.66g			SK180	棒状の破片				
33	鉄製品	現長2.5×1.5cm、断面幅0.6×0.4cm、重さ3.36g			SK359	フック状の破片				
34	鉄製品	現長8.1cm、断面幅1.0×0.5cm、重さ32.88g			SK369					
35	鉄製品	現長1.7cm、断面幅0.4×0.4cm、重さ1.17g			SK493・494	角棒状の破片	両側欠			
36	鉄製品	現長3.0cm、断面幅0.5×0.4cm、重さ2.38g			SK493・494	角棒状の破片	両側欠			
37	短刀	全長30.7cm、刃長20.8cm、刃幅最大2.7cm、背幅0.5cm、重さ181.81g			SK336	柄木の本質残存				
38	短刀	全長25.4cm、刃長18cm、刃幅最大2.1cm、背幅0.4cm、重さ96.57g			SK426					

地神遺跡奈良・平安時代土壇一覧

番号	グリッド	長軸方位	平面形	長さ	幅	深さ	備 考
1	W-49	N-2°-W	円形	0.84	0.59	0.52	SK2と重複 須恵器環
2	W-49	N-2°-W	不整形		1.26	0.16	SK1と重複 土師器環・角棒状鉄製品・須恵器環
3	W-49	N-30°-E	楕円形	1.58	1.21	0.17	須恵器環・須恵器蓋・土師器環・土師器蓋
4	W-49	N-75°-E	不整形長方形	1.28	1.12	0.23	須恵器環・土製紡錘車・刀子・土師器環・土師器蓋
5	W-49	N-3°-E	楕円形	1.59	1.19	0.26	SK6と重複 須恵器環・須恵器蓋・土師器環・土師器蓋
14	V-49	N-26°-W	楕円形	0.77	0.52	0.47	土師器環
18	V-49	N-66°-W	楕円形	1.51	0.83	0.84	SK28と重複 土師器環・土師器蓋
28	V-49	N-66°-W	楕円形	1.11	0.94	0.94	SK18と重複 須恵器蓋・須恵器環・土師器蓋
36	W-49	N-27°-E	不整形	1.01	0.57	0.57	角棒状鉄製品
47	V-49	N-62°-W	円形	0.81	0.73	0.49	須恵器環・土師器環
48	U-49	N-44°-W	円形	0.82	0.69	0.46	須恵器環・土師器環
58	U-49	N-66°-E	楕円形	0.89	0.53	0.47	須恵器環・須恵器蓋・土師器環・土師器蓋
180	T-48	N-63°-W	円形	0.81	0.68	0.24	棒状鉄製品
318	U-47	N-12°-W	不整形	1.72	1.44	0.17	須恵器環・土師器環・土師器蓋
336	S-46	N-65°-W	長方形	1.24	0.87	0.4	短刀・土師器
359	V-44	N-75°-W	長方形	3.12	1.77	0.16	フック状棒状鉄製品・須恵器環・土師器
369	W-45	N-22°-E	円形	0.77	0.71	0.52	不明鉄製品
373	S-45	N-79°-W	長方形	1.61	0.98	0.31	須恵器・土師器
393	V-44	N-84°-W	楕円形	0.74	0.54	0.28	
426	V-42	N-20°-E	長方形	0.77	0.56	0.15	短刀・須恵器高台付環・須恵器環・土師器
431	T-42	N-3°-W	楕円形	0.66	0.53	0.47	土師器環・土師器蓋
433	U-42	N-30°-E	円形	0.54	0.53	0.39	土師器環・土師器蓋
434	U-42	N-76°-E	楕円形	1.38	1.09	0.16	SK35・36・37・38と重複 土師器環・土師器蓋
435	U-42	N-49°-W	円形	1.09	1.02	0.22	SK34・36・37・38と重複 須恵器蓋・土師器環・土師器蓋
436	U-42	N-41°-E	楕円形		0.87	0.12	SK34・35・37・38と重複 土師器環・土師器蓋
437	U-42	N-82°-W	長方形	1.22	0.57	0.11	SK34・35・36・38と重複
438	U-42	N-6°-W	隅丸長方形	1.04	0.94	0.19	SK34・35・36・37と重複 須恵器環・土師器環・土師器蓋
439	U-42	N-15°-E	方形	1.02	0.91	0.14	須恵器環・土師器環・土師器蓋
446	U-42	N-4°-E	楕円形	1.52	1.16	0.17	SK466と重複 須恵器環・土師器環・土師器蓋
452	U-42	N-8°-E	円形	0.97	0.9	0.12	土師器環・土師器蓋
466	U-42	N-18°-E	楕円形	0.65	0.49	0.08	SK446と重複 土師器
493	V-42	N-88°-W	不整形	1.32	1.14	0.08	SK494と重複 磨石・角棒状鉄製品・土師器
494	V-42	N-19°-E	不整形	1.16	0.58	0.33	SK493と重複 角棒状鉄製品・土師器
530	V-41	N-43°-E	隅丸長方形	(2.01)	1.64	0.39	SJ23・SK535と重複 須恵器蓋・土師器環・須恵器蓋・須恵器大蓋・土師器蓋・土鍾
556	T-41	N-37°-W	不明			0.28	SK551と重複 土師器環・打斧
557	T-41	N-63°-E	長方形		0.72	0.41	須恵器環・土師器環・土師器蓋

(4) 方形周溝状遺構

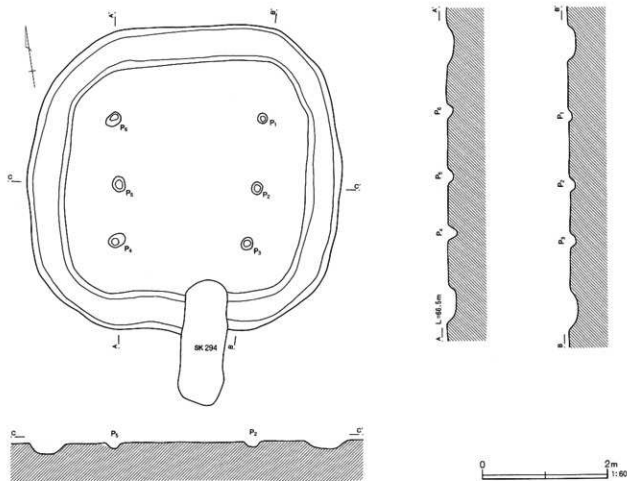
第1号方形周溝状遺構 (第112図)

Q-51グリッドに位置する。南辺を第294号土壌に壊される。平面形態はやや丸みを帯びた方形で、規模は東西5.00m、南北4.72mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。

溝の幅は40~63cmで、東辺が他辺よりやや狭い。深さは10~16cmと浅い。周溝内で掘立柱建物跡状の

ビットが6本検出された。2×1間の建物で、ビットは径15~27cmの円形または楕円形、深さは8~14cmである。東西2.35m、南北1.95mで、南辺ほど狭くなっている。但し、これらのビットに柱が建っていたかは、深度が浅く、判断できなかった。また、本遺構は中世の所産と考えられる第294号土壌に壊されていたが、出土遺物がなく、時期の決め手になるものがない。

第112図 方形周溝状遺構



2 塔頭遺跡

(1) 住居跡

第2号住居跡 (第113図)

J-7グリッドに位置する。幅5m強のトレンチ状の調査区域に沿うように検出された。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸4.10m、短軸2.95m、深さは0.12~0.17mである。主軸方位はN-81°-Eを指す。

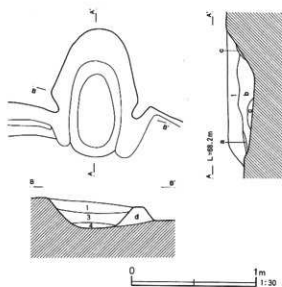
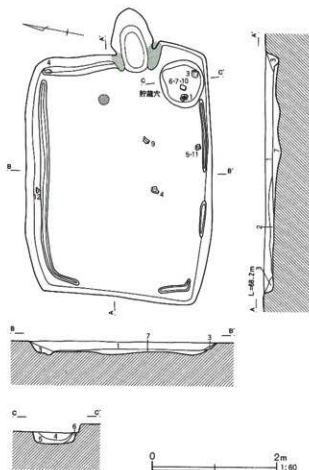
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は概ね3層に分けられ、ロームブロックが含まれていた。

カマドは東壁(ほぼ中央)に設置される。覆土中に焼土層や灰層は確認されなかった。袖は小さく、ローム粒

子を僅かに含む褐色土で構築されていた。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、71×77cmのやや歪んだ円形で、深さは17cmである。壁溝は貯蔵穴以外で断続的であるが全周する。幅6~15cm、深さ約5cmである。北壁と西壁で確認された壁溝は壁からやや離れている。ピットは検出されなかった。掘り形は西壁付近以外を掘り込み、カマド周辺でやや深くなっている。

出土遺物は多くはないが、接合率は良いようである。須恵器は坏、高台付坏、甕等が、土師器には坏、甕、台付甕が認められる。他には砥石が出土し、古墳時代の土器も混入していた。

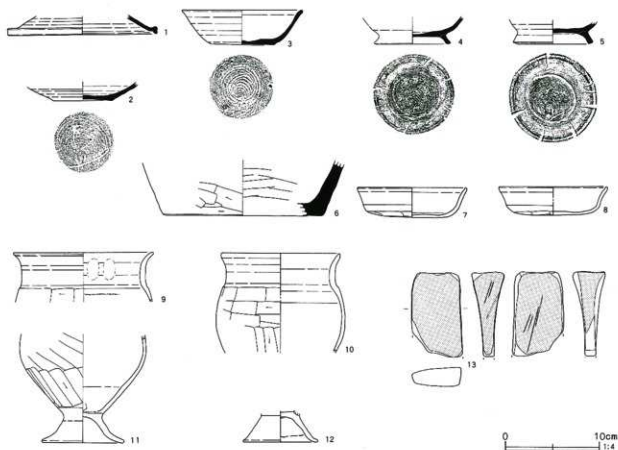
第113図 第2号住居跡



第2号住居跡

- | | | |
|---|-----|----------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック少、ローム粒多 |
| 2 | 黄褐色 | ロームブロック主体 |
| 3 | 黄褐色 | ローム主体、雲母屑土、有機質微材 |
| 4 | 暗褐色 | 焼土・ローム粒少 |
| 5 | 黒褐色 | 炭化物、焼土・ブロック少、ローム粒多 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒少 |
| 7 | 褐色 | ロームブロック・シルトブロック主体、貼床 |
- 第2号住居跡カマド
- | | | |
|---|------|---------------|
| a | 明黄褐色 | ローム粒主体 |
| b | 黒褐色 | 焼土・炭化物、ローム粒少 |
| c | 褐色 | 焼土・ローム粒多、炭化物少 |
| d | 褐色 | ローム粒微 |

第114図 第2号住居跡出土遺物



第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋	(15.8)	2.0		ABF	B	灰	30	貯蔵穴	末野産
2	皿		2.0	6.4	ABF	B	灰	70	貯蔵穴	末野産
3	坏	12.9	3.6	6.9	ABF	A	にぶい黄	85	貯蔵穴	末野産 回転系切り
4	高台坏		2.9	8.2	ABCG	A	灰	70	束壁際	産地不明
5	高台坏		2.6	8.5	ABFG	A	オリーフ黒	80	南壁際	末野産
6	甕		5.9	(17.2)	AF	A	灰	15	貯蔵穴	末野産
7	坏	11.6	3.2	8.9	AB'	A	褐灰	80	貯蔵穴	
8	坏	(11.4)	3.0	(8.4)	AB'G	A	褐灰	35	覆土	外面還元化
9	甕	(14.7)	5.2		AB'C	B	赤褐	20	床直	
10	甕	(12.5)	10.6		ABCFG	B	橙	20	貯蔵穴	
11	台付甕		11.5	8.4	ABG	A	にぶい褐	60	貯蔵穴	南壁際
12	台付甕		3.3	7.8	ABB'	A	明赤褐	95	貯蔵穴	北壁際
13	砥石	長さ8.9cm、幅5.3cm、厚さ3.4cm、重さ153.42g					覆土 凝灰岩		刃傷あり	

第3号住居跡 (第115図)

J-8グリッドを中心に位置する。第1号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北半部は、調査区域外にあり、検出されなかった。平面形態は、東西に長い長方形になると考えられる。規模は東西4.90m、南北の残長1.57m、深さは0.15~0.24mである。主軸方位はN-79°-Eを指す。

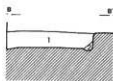
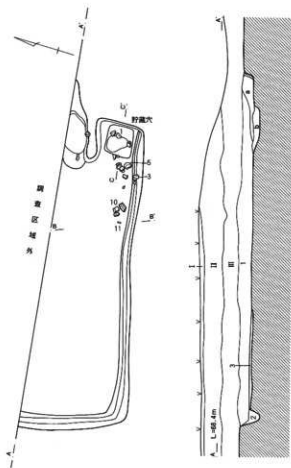
床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は大きく1層でロームブロックを多く含んでいる。

カマドは東壁に設置されるが、北半は検出できなかった。燃焼部は床面を10cm程掘り下げており、灰が

充填されていた。煙道部先端には焼土が残存していた。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、41×49cmのほぼ方形だが、底面は不整形となっていた。深さは17cmである。壁溝は、貯蔵穴の東側以外は全周するようである。幅15~23cm、深さ7~15cmである。ピットは検出されなかった。掘り形は、西壁近くでのみ僅かに掘り下げられていた。

出土遺物は多くないが、接合率は良い。須恵器は図示した環以外には、甕片が1片認められる程度である。土師器には、環、鉢、甕が見られ、甕胴部片が多い。他には板状鉄製品が出土している。

第115図 第3号住居跡



第3号住居跡

- | | | |
|----------|--------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | シルト質細砂 | ローム小ブロック多、焼土・炭化較少 |
| 2 におい黄褐色 | シルト質細砂 | ローム小ブロック微 |
| 3 におい黄褐色 | シルト | ローム小ブロック多、黏床 |
| 4 黒褐色 | 細砂質シルト | ローム小ブロック多、焼土・炭化物微
貯蔵穴覆土 |

第3号住居跡カマド

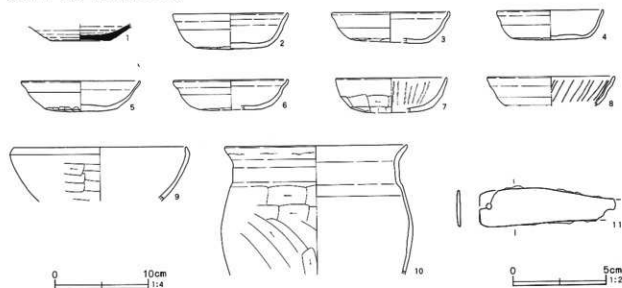
- | | | |
|-------|-----|--------------------------------|
| a 褐色 | シルト | ローム小ブロック・焼土ブロック多、炭化物微
天井崩落土 |
| b 暗褐色 | 灰層 | ローム小ブロック少、焼土・炭化較多 |

I 灰黄褐色

- | | |
|---------|--------------------|
| 現代耕作土 | |
| II 暗褐色 | 浅間B軽石・ローム較少 中近世水田層 |
| III 黒褐色 | 浅間B軽石多 |



第116図 第3号住居跡出土遺物



第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏		1.8	(6.7)	ABF	B	灰	40	貯蔵穴	木野産
2	坏	12.2	3.8	7.8	ABG	B	橙	75	覆土	
3	坏	12.4	3.3	8.3	ABC	B	明赤褐	75	南壁際	
4	坏	(11.2)	3.1	(8.2)	ABC	A	明赤褐	40	覆土	
5	坏	12.6	3.2	7.8	AB'G	C	にょい赤褐	55	南壁際	
6	坏	(12.2)	3.2	(6.8)	AB'C	A	赤褐	30	覆土	
7	坏	(11.8)	3.6	(8.9)	AB'C	B	にょい赤褐	35	覆土	
8	坏	(13.4)	3.1	(10.0)	AB'G	B	明赤褐	30	覆土	
9	鉢	(18.4)	5.7		AB'G	B	赤褐	10	覆土	
10	甕	(19.3)	13.6		AB'CFG	B	にょい赤褐	20	南壁際	
11	鉄製品	現長7.3cm、最大幅1.9cm、厚さ0.1cm、重さ9.18g			南壁際	板状の破片				

VI 中世の遺構と遺物

地神遺跡・塔頭遺跡では、中世の所産と考えられる遺構が多数検出された。遺構は両遺跡に広く分布し、各遺跡に分けて記述すると各遺構の関係が曖昧になるため、両遺跡をまとめて記述する。但し、土壌と井戸

跡は、発掘時の遺構番号を変更していないため、遺構番号が重複している。なお、塔頭遺跡第2号井戸跡は欠番となっている。

1 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 (第118図)

V-46グリッドを中心に位置する。平面形態は南北に長い隅丸の長方形で、規模は長軸6.60m、短軸4.23m、深さは中央部で0.25mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏がある。西壁以外はなだらかに立ち上がる。覆土は大きく2層に分かれ、白色火山灰を含んでいる。南西コーナーは飛び出しているが、この部分が本遺構に関係するかどうかは判断できなかった。

ピットは12本検出されたが、P1~P10までが本遺構に関係すると考えられる。但し、P4~P6の何れが伴うものかは判断できなかった。

出土遺物は瓦質の片口鉢や、釘と思われる鉄製品が見られるが、混入と思われる須恵器、土師器も出土し

ている。

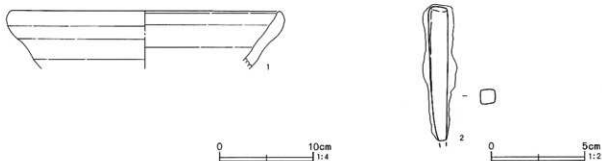
第2号竪穴状遺構 (第119図)

U-17グリッドを中心に位置する。平面形態は南北に長い楕円形で、規模は長軸9.00m、短軸3.25m、深さは中央付近で0.31mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。

床面は皿状で、壁の立ち上がりはなだらかである。極めて多くのピットが見られ、何れが本遺構に伴うものかは判断できなかった。

出土遺物は少なく、片口鉢と、混入と思われる土師器小片が見られる程度である。他は古銭と馬の歯が出土している。第119図の1は元豊通宝(北宋・1078初鋳)、2は淳化元宝(北宋・990初鋳)である。

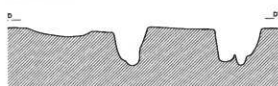
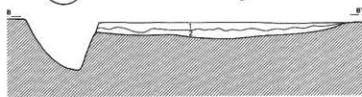
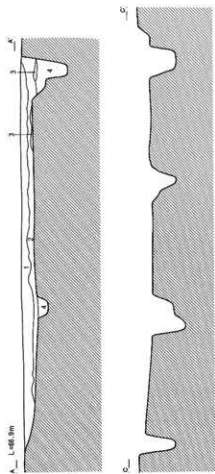
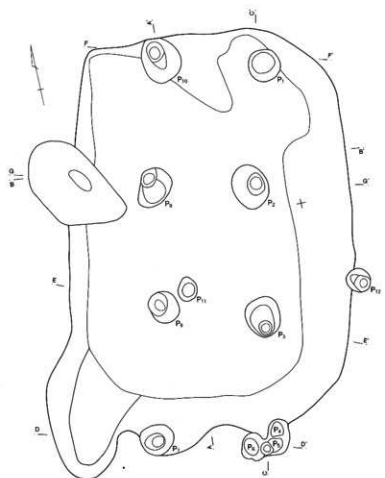
第117図 第1号竪穴状遺構出土遺物



第1号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	瓦質片口鉢	(28.6)	6.1		AB'G	B	黄灰		覆土	13~14世紀前半
2	釘?								現長7.2cm、断面幅0.8×0.7cm、重さ24.35g	覆土

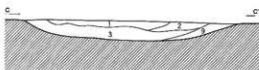
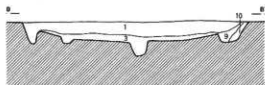
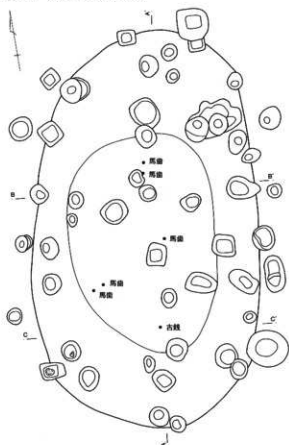
第118図 第1号竪穴状遺構



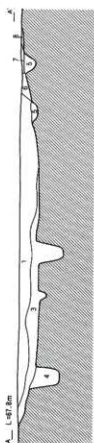
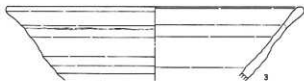
- 第1号竪穴状遺構
- 1 黒褐色 焼土少、白色火山灰
 - 2 黒褐色 ローム粒・焼土・白色火山灰多
炭化較少
 - 3 暗褐色 ロームブロック・ローム粒多、焼土
微、白色火山灰
 - 4 黒褐色 ビット ローム粒、焼土
白色火山灰少



第119図 第2号竪穴状遺構

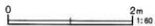


第120図 第2号竪穴状遺構出土遺物



第2号竪穴状遺構

- 1 黒褐色 木炭、焼土、小石、ロームブロック混入
- 2 黒褐色 ロームブロック多、鉄塊、焼土、砂混入
- 3 黒褐色 石多、古銭混入
- 4 黒褐色 ロームブロック・ローム粒少
- 5 黒褐色 焼土少、小石砂粒
- 6 黒褐色 砂粒多、ロームブロック少
- 7 黒褐色 ローム粒少、砂粒少
- 8 黒褐色 ローム粒、焼土混
- 9 黒褐色 焼土、ロームブロック、砂粒混
- 10 黒褐色 ロームブロック、礫



第2号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	元豐通宝	北宋 1078年初鑄								
2	淳化元宝	北宋 990年初鑄								
3	山茶碗系片口鉢	(31.4)	7.8	(11.8)	AB	A	灰	5	覆土	13世紀 口縁部に自然輪付着 13世紀 内面摺り減る
4	山茶碗系片口鉢		5.9		AF	A	灰黄	5	覆土	
5	山茶碗系片口鉢		7.4		ABG	A	黄灰	5	覆土	
6	山茶碗系片口鉢		2.3		ABG	A	灰白		覆土	

2 掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡 (第121・122図)

地神遺跡内のT-48グリッドを中心に位置する。5×2間の総柱の建物で、桁行10.40m、梁行3.40mだが、梁行は南に行くに従って僅かに短くなる傾向が見られる。また、桁行と梁行が直行せず、やや歪んだ形態となっている。主軸方位はN-2°-Wを指す。

柱穴は径25~45cmの円形で、深さは16~38cmである。覆土の状態は不明である。

遺物は出土しなかった。

第5号掘立柱建物跡 (第123図)

地神遺跡内のT-47グリッドに位置する。3×2間の総柱の建物で、第6号掘立柱建物跡とはほぼ直行して重複する位置にあるが、新旧関係は明確でない。桁行5.85m、梁行3.70mである。柱筋はほぼ通るが、P

7は内側に入っている。主軸方位はN-80°-Wを指す。

柱穴は径25~35cmの円形で、深さは22~42cmである。覆土の状態は不明である。

遺物は出土しなかった。

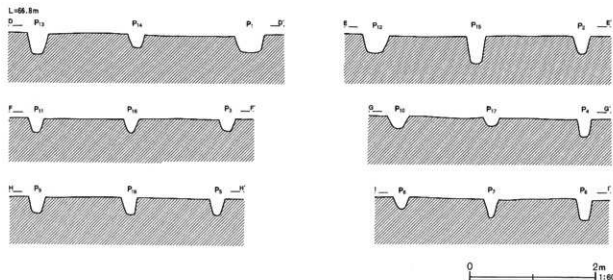
第6号掘立柱建物跡 (第124図)

地神遺跡内のT-47グリッドを中心に位置する。3×2間の総柱の建物で、第5号掘立柱建物跡と重複するが、新旧は明らかでない。桁行5.15m、梁行3.80m。柱筋はほぼ通るが、P11、P12はやや北に寄っている。主軸方位はN-10°-Eを指す。

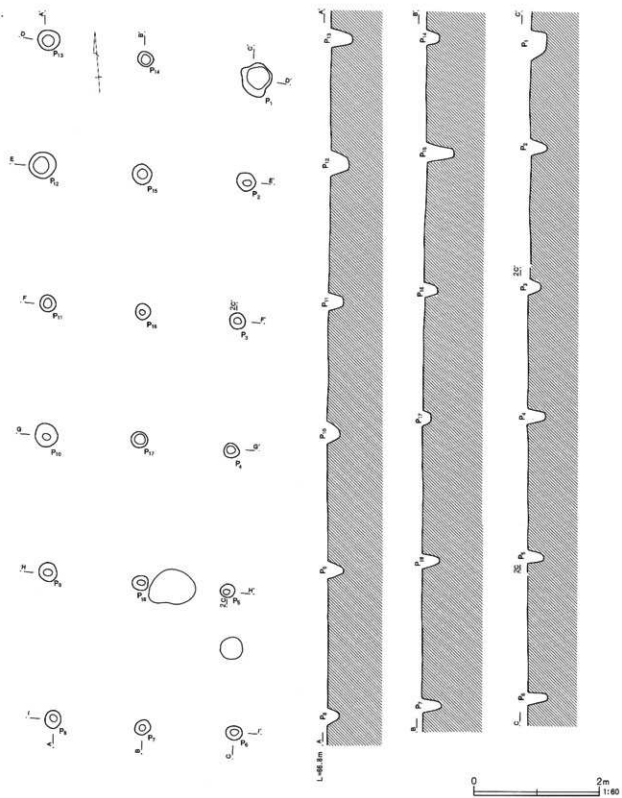
柱穴は径20~42cm、深さは28~42cmである。覆土の状態は不明である。

遺物は出土しなかった。

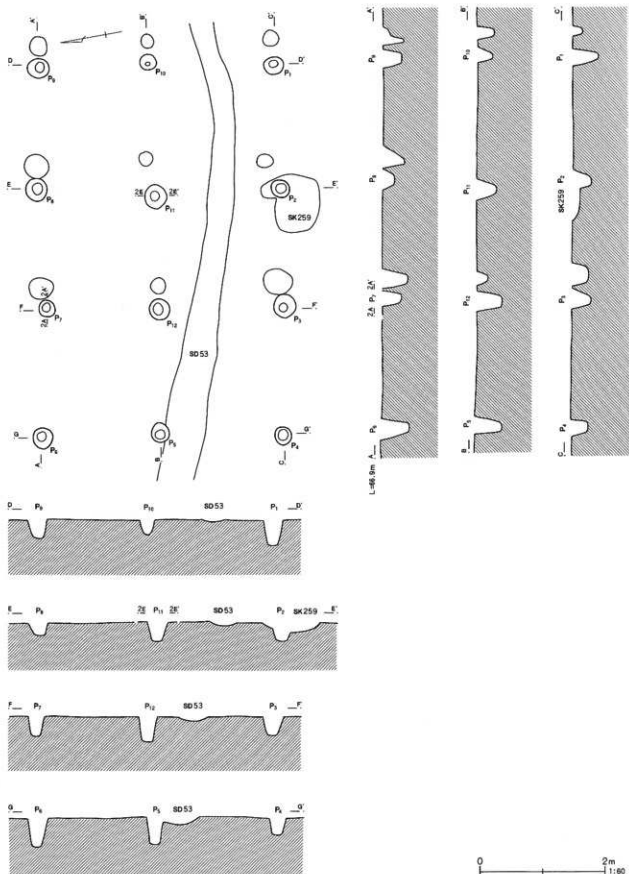
第121図 第4号掘立柱建物跡(1)



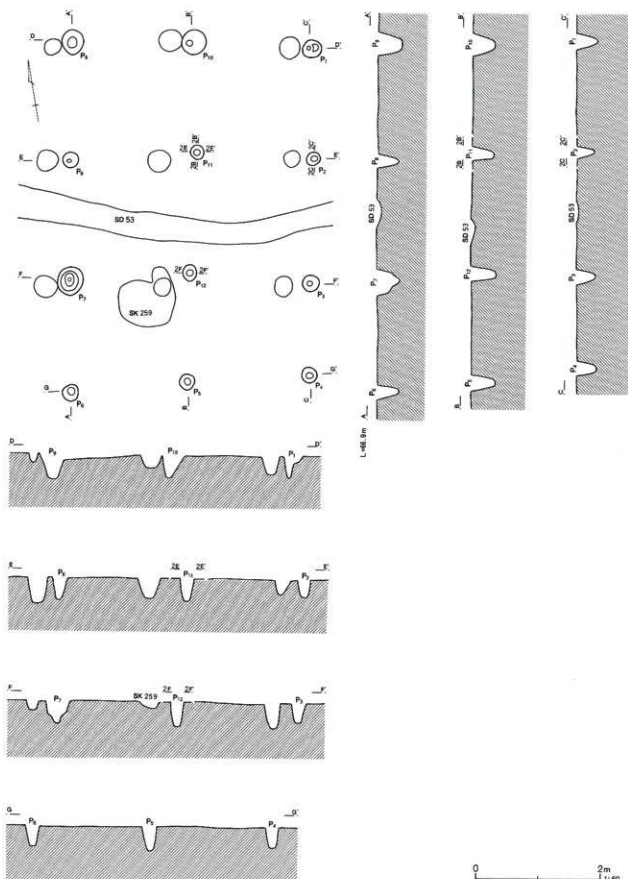
第122图 第4号掘立柱建物跡(2)



第123图 第5号掘立柱建物跡



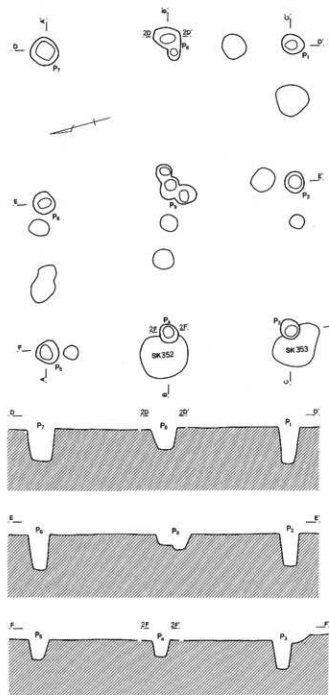
第124图 第6号掘立柱建物跡



第7号掘立柱建物跡 (第125図)

地神遺跡内のV-45グリッドに位置する。2×2間の総柱の建物で、桁行4.50m、梁行3.90mで、やや歪んでいる。主軸方位はN-75°-Wを指す。周辺には小ピットが多数あり、それらとの関係も考えたが、適当なピットは見つけ出せなかった。

柱穴は径32~45cmの円形で、深さは26~60cmである
第125図 第7号掘立柱建物跡

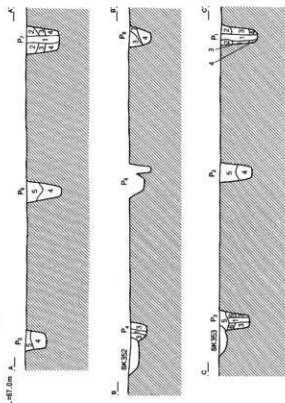


る。明確な柱痕が確認できたのは4本である。

遺物はごく僅かだが、須恵器の蓋と思われる破片や、器種は不明だが土師質の小破片が出土している。

第8号掘立柱建物跡 (第126図)

地神遺跡内のS-44グリッドに位置する。3×2間の総柱の建物と思われるが、北西側の2本のピット



第7号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色 焼土多、ローム粒・白色火山灰・炭化粒多
- 2 暗褐色 ローム粒多、白色火山灰少
- 3 黒褐色 ローム粒少
- 4 暗褐色 ローム粒多
- 5 暗褐色 2層に似るが、ローム粒少・大
- 6 黒褐色 3層に似るが、ローム粒多
- 7 暗褐色 ローム粒少

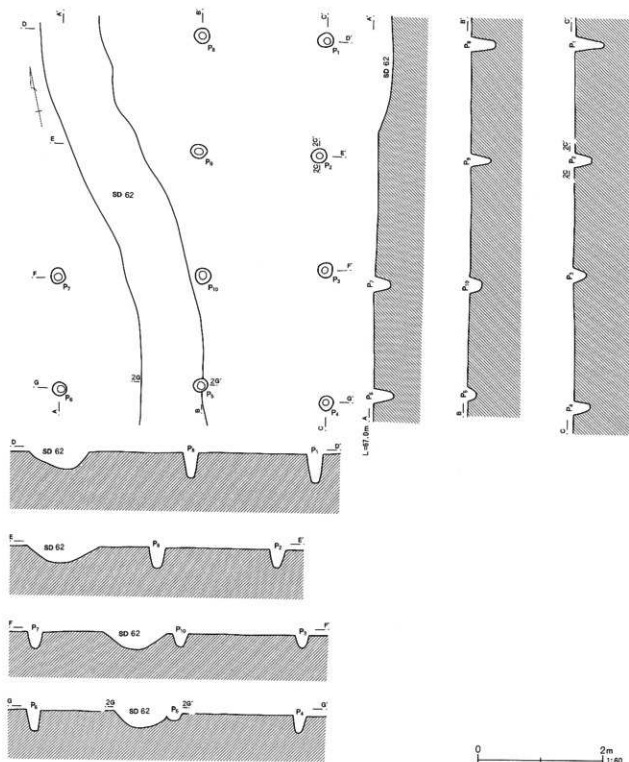
が検出できなかった。北西隅のピットは第62号溝跡に壊されたと考えたとしても、その南のものか検出できなかった点に疑問が残る。柱筋はあまりきれいに通らない。規模は、桁行5.70m、梁行4.25mで、主軸方

位はN-12°-Eを指す。

柱穴は径20~25cmの円形であるが、深さが16~48cmと幅がある。覆土の状態は不明である。

遺物は出土しなかった。

第126図 第8号掘立柱建物跡



第9号掘立柱建物跡 (第127図)

地神遺跡内のN-39グリッドに位置する。2×1間の建物で、他の掘立柱建物跡や住居跡とは離れた調査区の北側に位置する。やや歪んでおり、桁行2.85m、梁行2.10mで、主軸方位はN-50°-Eを指す。

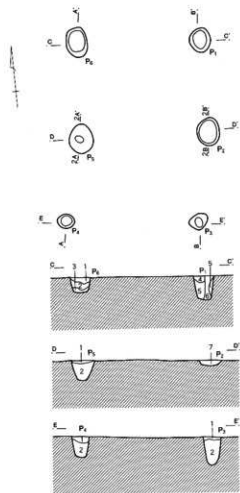
柱穴は径45~20cmの円形あるいは楕円形で、深さは10~46cmである。南側の2本は小さいが、深さはある。柱痕が確認できたのはP1のみである。

遺物は出土しなかった。

第10号掘立柱建物跡 (第128図)

地神遺跡内のS-30グリッドを中心に位置する。3×2間の総柱の建物で、北側と西側に庇を持つ。母屋の桁行6.15m、梁行4.10mである。母屋と北側の庇の間は0.8m、西側の庇との間は0.85mである。柱筋はやや歪み、母屋と比較すると、庇の歪みが大きい。

第127図 第9号掘立柱建物跡



主軸方位はN-86°-Wを指す。

柱穴は径16~30cmの円形で、母屋と庇との差は見られない。深さは14~42cmで、庇の方が深く掘り込む傾向が見られる。覆土の状態は不明である。

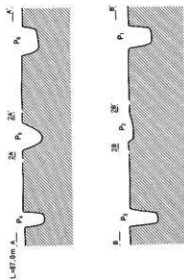
遺物は出土しなかった。

第11号掘立柱建物跡 (第129図)

地神遺跡内のO-31グリッドに位置する。2×2間の総柱の建物であるが、歪みが見られ、特にP2、P9、P6の柱筋が大きく傾くには疑問が残る。規模は、桁行3.70m、梁行3.25mで、東西がやや大きい。主軸方位はN-86°-Wを指す。

柱穴は径16~32cmと不揃いで、深さは12~26cmである。覆土の状態は不明である。

遺物は出土しなかった。

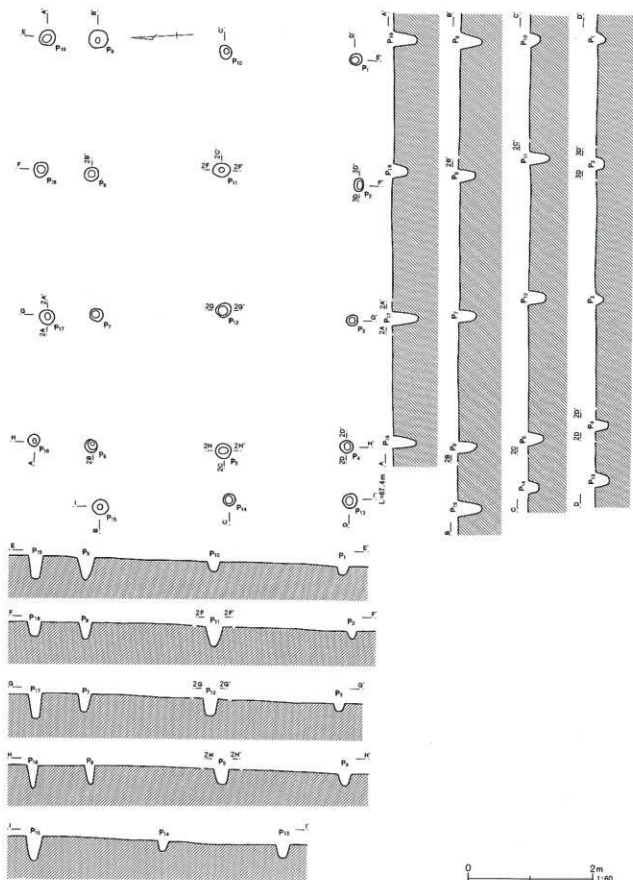


第9号掘立柱建物跡

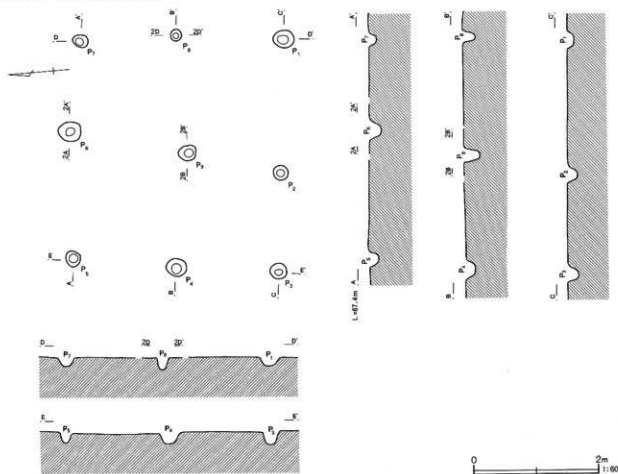
- 1 黒褐色 ローム粒・ロームブロック・白色火山灰多
- 2 黒褐色 白色火山灰多、ローム粒・ロームブロック少
- 3 暗褐色 ローム基調、白色火山灰・黒褐色粒少
- 4 黒褐色 ローム粒・ロームブロック極多
- 5 黒褐色 4に似るが、ロームブロック少
- 6 黒褐色 ローム粒・ロームブロック少、砂質
- 7 暗褐色 黒褐色粒多、白色粒少



第128图 第10号掘立柱建物跡



第129図 第11号掘立柱建物跡



第12号掘立柱建物跡 (第130図)

地神遺跡と塔頭遺跡の境のO-30グリッドを中心に位置する。2×2間の建物で、規模は桁行4.45m、梁行4.15mである。柱間は東西がやや長い。主軸方位はN-87°-Wを指す。

柱穴は径21~28cmの円形で、深さは16~32cmである。大半のビットで柱痕が確認され、P6では底面に河原石が設置されていた。

遺物は出土しなかった。

第13号掘立柱建物跡 (第131図)

塔頭遺跡内のS-28グリッドに位置する。2×2間の総柱の建物で、西側と北側に庇を持つと考えられる。母屋の桁行、梁行共に4.40mで、西側の庇との間は0.90m、北側の庇との間は1.00mである。但し、北側の庇は、北東側のビットが検出されず、他の2本も

母屋の柱筋からややずれている。主軸方位はN-1°-Wを指す。

柱穴は径15~22cmの円形で、深さは18~44cmである。柱痕が確認されたものはなく、覆土は1層で、浅間B軽石を含んでいた。

遺物は出土しなかった。

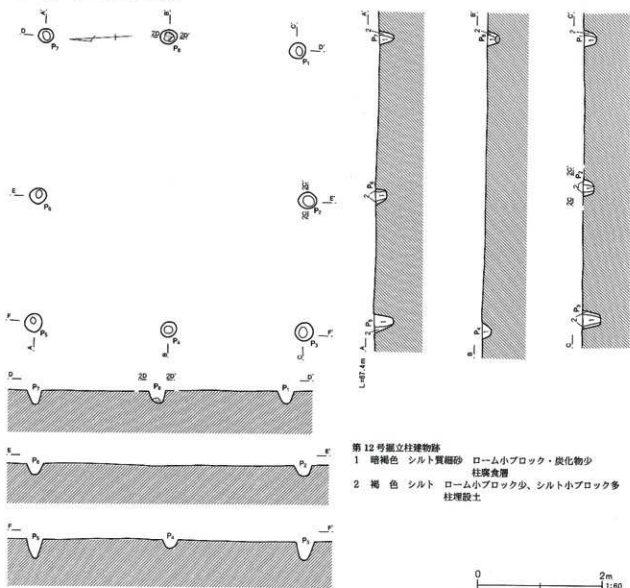
第14号掘立柱建物跡 (第132図)

塔頭遺跡内のS-28グリッドを中心に位置する。3×2間の総柱の建物で、規模は、桁行5.30m、梁行3.85mである。全体にやや歪みが見られ、西辺は顕著である。主軸方位はN-90°-Eを指す。

柱穴は径20~25cmの円形で、深さは12~30cmである。覆土の状態は明瞭ではないが、浅間B軽石を含んでいた。

遺物は出土しなかった。

第130図 第12号掘立柱建物跡



第12号掘立柱建物跡

- 1 暗褐色 シルト質細砂 ローム小ブロック・炭化物少
柱腐食層
2 褐色 シルト ローム小ブロック少、シルト小ブロック多
柱埋設土

第15号掘立柱建物跡 (第133図)

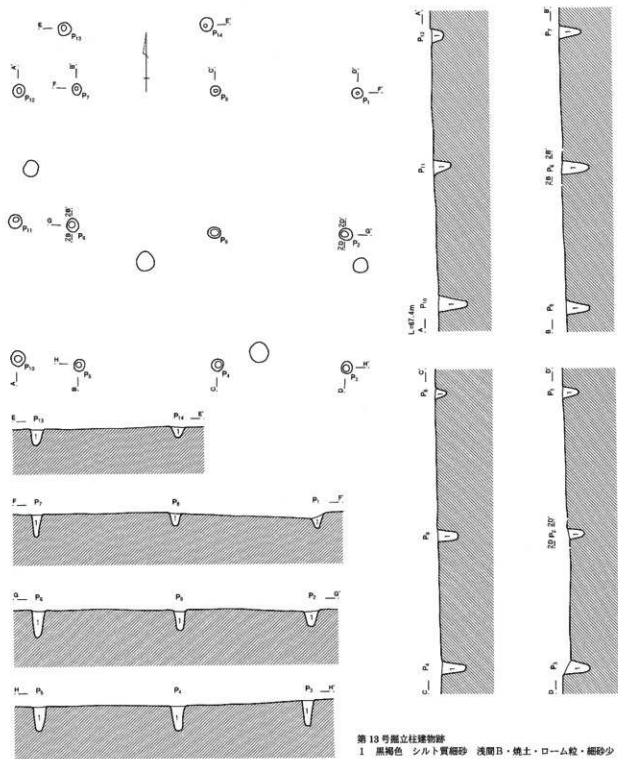
塔頭遺跡内のR-27グリッドに位置する。2×2間の柱の建物で、東側と西側に庇を持つと考えられる。母屋は桁行、梁行共に3.30m、母屋と東側の庇との間は1.70m、西側の庇との間は1.45mである。柱筋はやや歪んでおり、東西の庇共、中間の柱穴は検出さ

れなかった。主軸方位はN-90°-Eを指す。

柱穴は径20~44cmの円形または楕円形で、深さは6~28cmである。覆土は2層に分けられるが、何れも浅間B軽石を含んでいた。

遺物は土師質の小片が2片出土しただけである。

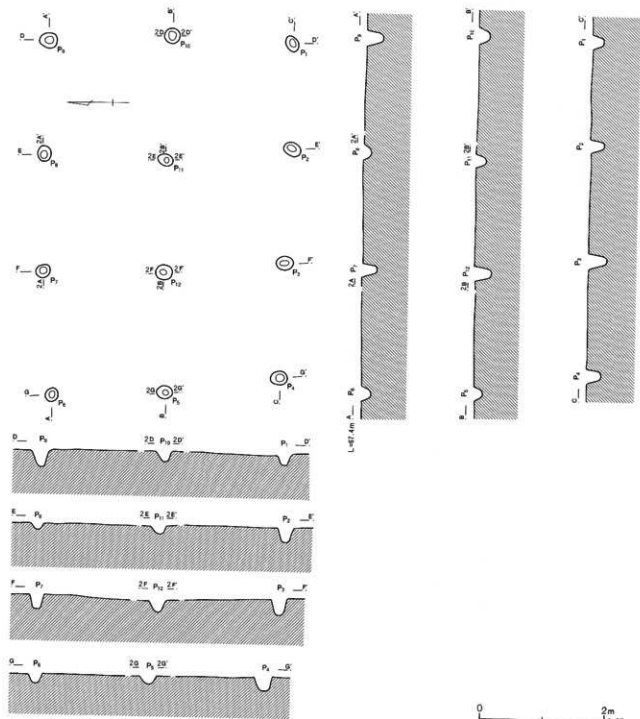
第131图 第13号掘立柱建物跡



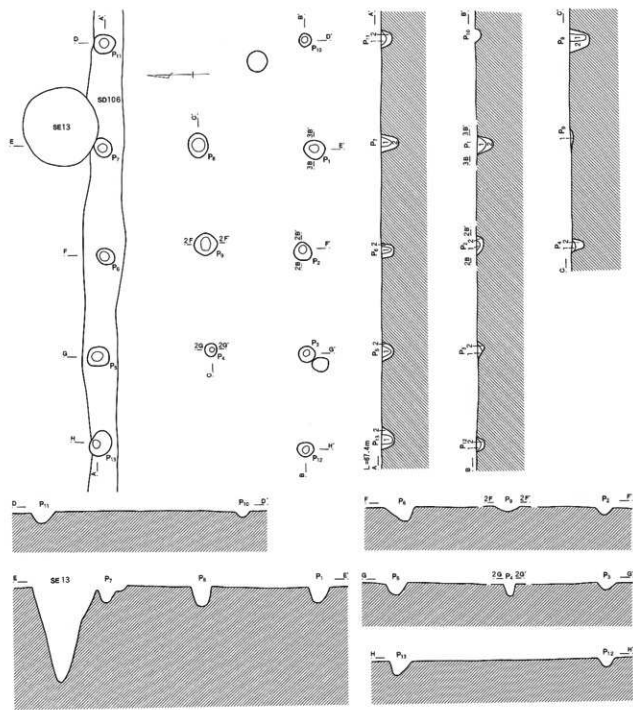
第13号掘立柱建物跡
1 黒褐色 シルト質細砂 浅間口・焼土・ローム粒・細砂少

0 2m
1:60

第132图 第14号孤立柱建物跡



第133図 第15号獨立柱建物跡



第 15 号獨立柱建物跡

- 1 黒褐色 砂質シルト 浅間B・大・オレンジ斑鉄少
 2 暗褐色 砂質シルト 浅間B・小・大・オレンジ斑鉄少

0 2m 1:60

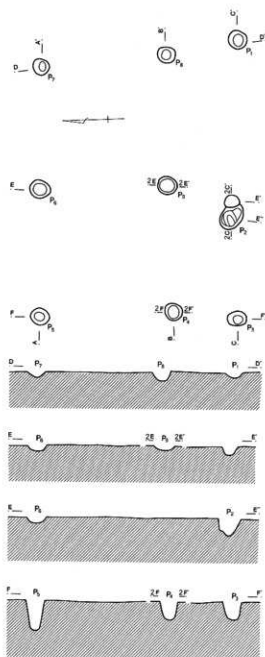
第16号掘立柱建物跡 (第134図)

塔頭遺跡内のQ-26グリッドを中心に位置する。調査時は2×1間の建物で、南側に庇を持つと考えたが、庇の柱穴が母屋の柱筋から外れるため、庇を持たない可能性が高い。母屋と考えた部分の桁行は4.00m、梁行2.05m。主軸方位はN-88°-Wを指す。

柱穴は径25～30cmの円形で、深さは10～46cmである。覆土は1層で、浅間B軽石を含んでいた。

遺物は出土しなかった。

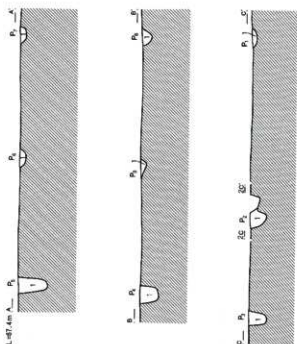
第134図 第16号掘立柱建物跡



第17号掘立柱建物跡 (第135図)

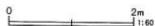
塔頭遺跡内のQ-27グリッドに位置する。4×1間の建物で、第18・19号掘立柱建物跡と重複する位置にあるが、新旧関係は不明である。規模は桁行が8.70mで、梁行は北辺が3.85m、南辺が4.20mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

柱穴は径20～40cmの円形で、深さは8～22cmと比較的浅い。覆土は1層で、焼土粒子、ロームブロックを含んでいた。遺物は出土しなかった。

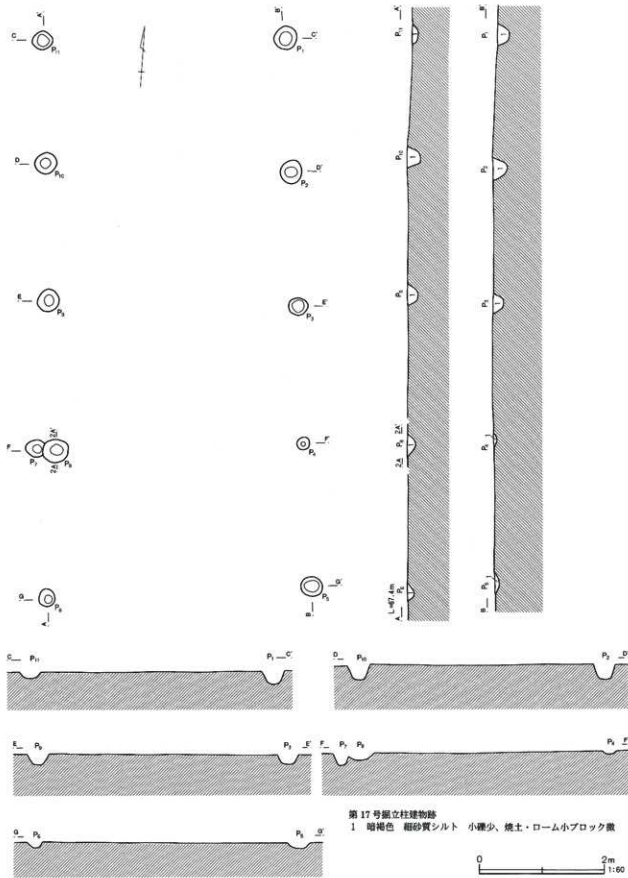


第16号掘立柱建物跡

1 暗褐色 細砂質シルト 浅間B微、ローム小ブロック多



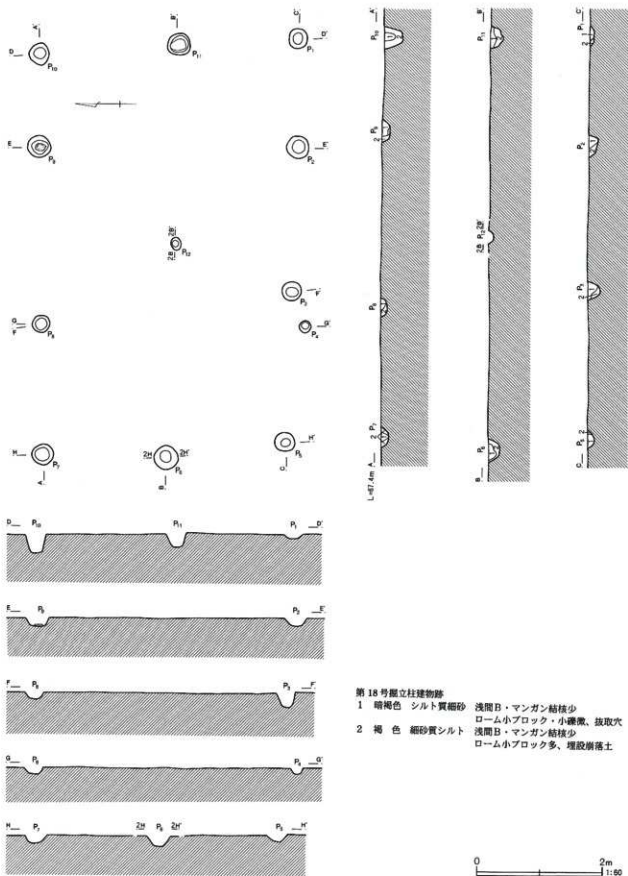
第135図 第17号掘立柱建物跡



第17号掘立柱建物跡
1 暗褐色 細砂質シルト 小礫少、焼土・ローム小ブロック散

0 2m 1:60

第136図 第18号掘立柱建物跡



第18号掘立柱建物跡 (第136図)

塔頭遺跡内のQ-27グリッドを中心に位置する。3×2間の建物で、第16号掘立柱建物跡の東に位置し、第17号掘立柱建物跡と重複する関係にあるが、新旧関係は明らかでない。桁行6.30m、梁行4.05mだが、桁行中央の間が他より若干広くなっている。また、他の柱穴より小さいが、P12が建物中心に位置しており、何らかの機能を有していたと考えられる。P3とP4は、P3だと北に寄ってしまうが、P4だと柱筋からずれる。主軸方位はN-90°-Wを指す。

柱穴は径26~37cmの円形で、深さは8~30cmである。P12は径20cm、深さ10cmである。覆土には浅間

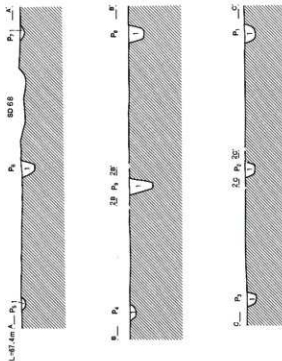
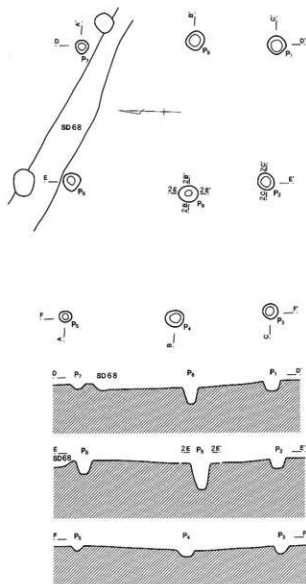
B軽石が含まれていた。遺物は出土しなかった。

第19号掘立柱建物跡 (第137図)

塔頭遺跡内のP-27グリッドに位置する。調査時は2×2間の総柱の建物と考えていたが、2×1間の南庇の可能性もある。第17号掘立柱建物跡と重複する位置にあるが、重複関係は明らかでない。庇持ちの建物とした場合、桁行4.30m、梁行1.80m、庇との間は1.35mとなる。主軸方位はN-90°-Wを指す。

柱穴は径20~30cmの円形で、深さは6~38cmである。覆土には浅間B軽石が含まれていた。

遺物は出土しなかった。



第19号掘立柱建物跡

1 黒褐色 シルト質細砂 浅間B少・ローム小ブロック・炭化物少、焼土微

0 2m 1:60

第20号掘立柱建物跡 (第138図)

塔頭遺跡内のP-28グリッドに位置する。2×2間の総柱の建物で、第19号掘立柱建物跡の北に位置する。規模は桁行4.40m、梁行3.45mだが、全体に歪みがある。主軸方位はN-0°-Wを指す。

柱穴は径18~35cmの円形で、深さは8~30cmである。覆土には浅間B軽石が含まれていた。

出土遺物は土師質の小片が2片出土した。

第21号掘立柱建物跡 (第139図)

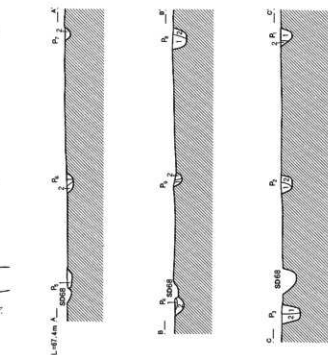
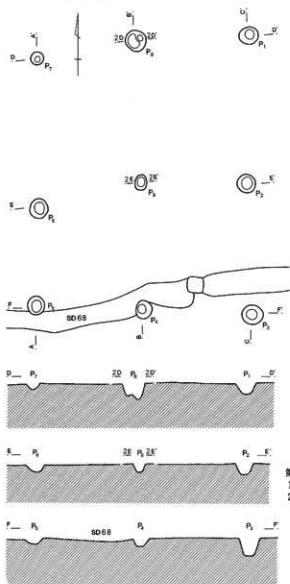
塔頭遺跡内のO-27グリッドで、第19号掘立柱建

物跡の北に位置する。3×2間の建物と思われるが、北辺の中間柱が検出されず、2×2間の北庇とも考えられる。しかし、後者の場合母屋と庇の間が広すぎると感じられる。何れにしても南西隅柱が南に飛び出す。3×2間とした場合、桁行5.00m、梁行3.75mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。

柱穴は径24~43cmの円形で、深さは12~26cmである。覆土には浅間A軽石と思われる火山灰が含まれており、近世以降の所産の可能性はある。

遺物は出土していない。

第138図 第20号掘立柱建物跡

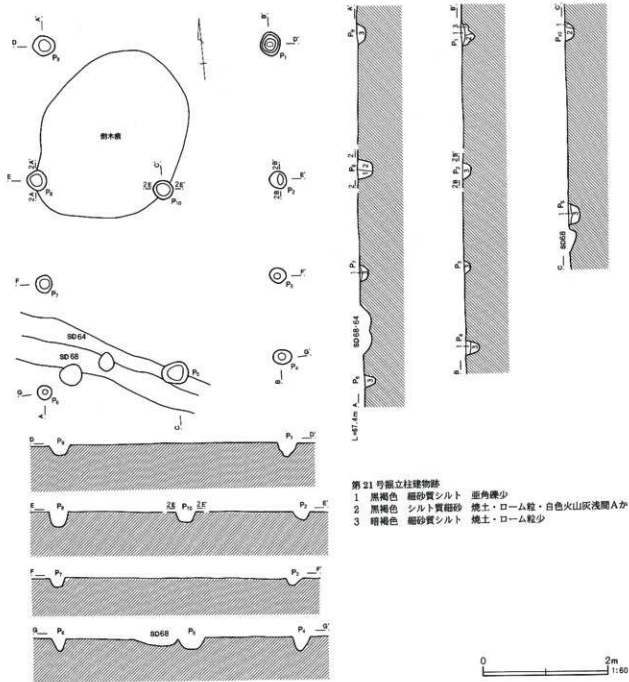


第20号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色 シルト質細砂 浅間B少、炭化物多、ローム小ブロック微、柱礎食害
- 2 暗褐色 細砂質シルト 浅間B多、ローム小ブロック多、柱礎殺土



第139図 第21号掘立柱建物跡



第21号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色 細砂質シルト 歪角礫少
- 2 黒褐色 シルト質細砂 焼土・ローム粒・白色火山灰液間Aか
- 3 暗褐色 細砂質シルト 焼土・ローム粒少

第22号掘立柱建物跡 (第140図)

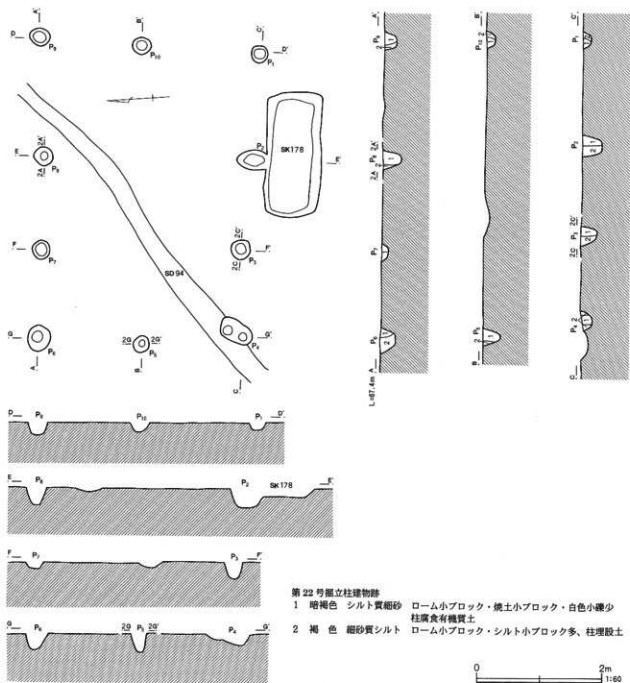
塔頭遺跡内のO-27グリッドに位置する。3×2間の建物で、規模は、桁行4.60m、梁行3.40mで、全体に至みが見られる。P2は第178号土壌と重複しているが、新旧は明らかでない。主軸方位はN-86°-

Wを指す。

柱穴は径25~40cmの円形または楕円形で、深さは12~32cmである。覆土には柱痕と思われる層が観察できた。

遺物は出土していない。

第140図 第22号掘立柱建物跡



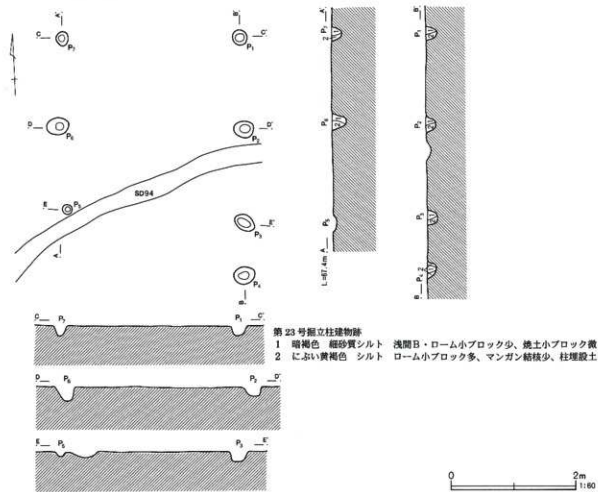
第23号掘立柱建物跡 (第141図)

塔頭遺跡内のN-27グリッドに位置する。2×1間の建物で、底の南西隅柱が検出されていないため、底の存在に疑問が残るが、南側に底を持つ可能性がある。規模は、桁行2.95m、梁行2.85mで、やや歪みがある。

ある。主軸方位はN-2°-Wを指す。

柱穴は径16~35cmの円形または楕円形で、深さは8~24cmである。柱底と思われる部分には、浅間B軽石が含まれていた。遺物は出土していない。

第141図 第23号掘立柱建物跡



第24号掘立柱建物跡 (第142図)

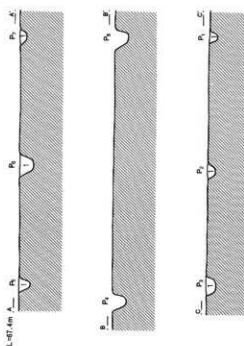
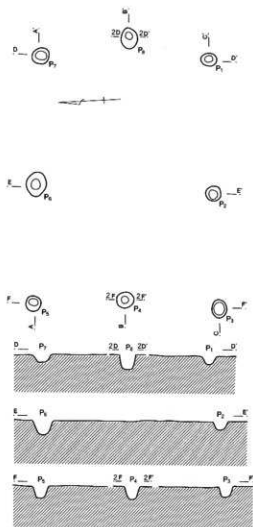
塔頭遺跡内のN-27グリッドに位置する。第24号掘立柱建物跡の西にある。2×1間の建物で、東辺の中間柱が東に飛び出す。規模は、桁行3.90m、梁行2.80mで、西辺がやや広い。主軸方位はN-88°-W

を指す。

柱穴は径25~38cmの円形で、深さは12~22cmである。覆土には浅間B軽石が含まれていた。

遺物は出土しなかった。

第142図 第24号掘立柱建物跡



第24号掘立柱建物跡
1 暗褐色 細砂質シルト 浅間石・ローム小ブロック少、小礫混、抜取穴



3 土壌

地神遺跡第16号土壌 (第146図)

V-49グリッドに位置する。平面形態は円形で、径約1.15m、深さ0.15mである。遺物は土師質の破片が出土している。

地神遺跡第76号土壌 (第146図)

T-49グリッドに位置する。第78号土壌と重複するが、新田は明らかでない。平面形態は三角形に近い不整形で、長さ1.23m、幅0.91m、深さ0.08mである。床面に焼土が散布していた。遺物は出土しなかった。

地神遺跡第128号土壌 (第147図)

S-49グリッドに位置する。第129号土壌と重複するが、新田は明らかでない。平面形態は東西に長い長方形で、長さ4.57m、幅1.04m、深さ0.34mである。遺物は土師質の小片が2片出土しただけである。

地神遺跡第217号土壌 (第147図)

R-50グリッドに位置する。平面形態は長方形で、長さ1.60m、幅0.67m、深さ0.08mである。人骨および歯が出土した。

地神遺跡第284号土壌 (第148図)

W-46グリッドに位置する。第290号土壌と重複するが、新田は明らかでない。北側を擾乱に壊され、平面形態は不明である。残長は0.77mで、深さ0.22mである。遺物は、13世紀代の常滑片口鉢、山茶碗承片口鉢、灰釉鉢や土師質の小片、角閃石安山岩が出土している。

地神遺跡第307号土壌 (第148図)

W-46グリッドに位置する。第308・309号土壌と重複するが、新田は明らかでない。平面形態は楕円形または隅丸長方形と考えられる。幅は0.64m、深さ0.16mである。遺物は、口縁近くに穿孔が見られる瓦質の盤と、土師質の小片18片が出土している。

地神遺跡第340号土壌 (第149図)

R-46グリッドに位置する。第58号溝跡と重複するが、新田は明らかでない。平面形態はやや崩れた方形で、長さ1.46m、幅1.39m、深さ0.44mである。遺物は、器種不明の土師質の小片6片と馬の歯が出土している。

地神遺跡第377号土壌 (第149図)

S-45グリッドに位置する。第19号住居跡を壊している。平面形態はほぼ方形で、長さ0.93m、幅0.82m、深さ0.27mである。遺物は土師質の小片が2片出土したのみだが、東壁際から長楕円形の自然石が検出された。

第143図 地神遺跡中世土壌配置図(I)

